

市内遺跡調査報告書

第 11 集

市内遺跡調査報告書

第 11 集

二〇一六

茨城県石岡市教育委員会

2016

茨城県石岡市教育委員会

石岡市埋蔵文化財調査報告書

市内遺跡調査報告書

第 11 集

2016

茨城県石岡市教育委員会

例　　言

1. 本書は平成 26 年度（平成 27 年 2 月まで）に石岡市が行った試掘調査・工事立会いに関する報告書である。また、石岡市出土遺物についての論考・資料紹介も収録した。

2. 調査は石岡市教育委員会が主体となって実施した。

3. 現地調査は谷仲俊雄が担当した。また、調査・整理の参加者は、下記の通りである。

五十嵐正 岡田正夫 北山敏道 小松崎利夫 酒井 洋 永瀬敬子 牧田保身 山口晋一 吉田幸男

石崎亘子 大野幸枝 城戸佳七子 木村友子 佐々木博子 鈴木真紀子 長谷川則子 吉野文子

なお、遺構・遺物の実測・トレースは谷仲・木村・佐々木・長谷川が、採拓は石崎・大野・城戸・木村・佐々木・鈴木・長谷川・吉野が行った。

4. 本書の執筆は、I・II・III は谷仲が行った。IV については、矢野徳也、松本太郎、山路直充の各氏より玉稿をいただいた。

5. 調査に関する遺物・図面・写真等の資料はすべて石岡市教育委員会で保管している。

6. 現地調査及び報告書刊行に当たっては下記の方々からご指導・ご協力をいただいた。ここに記して、感謝申し上げる次第である。（敬称略・五十音順）

茨城県教育庁文化課 市立市川考古博物館

赤井博之 片野 仁 川井正一 佐々木義則 白田正子 野村眞一

7. 事務局は下記の通りである。

櫻井 信（教育長）、宮本秀男（教育部長）、横田克明（次長）、武石 誠（文化振興課長）、原田和宣（文化振興課課長補佐）、安藤敏孝・木植 繁・小杉山大輔（文化振興課係長）、谷仲俊雄・鈴木万梨映・柘植貴恵（課員）

凡　　例

1. 本書使用の方位は磁北である。ただし、都市計画図を利用した調査地点位置図および図 21・22・38 については座標北である。

2. 本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、土器・軒瓦 1/3、平瓦・丸瓦 1/6 を基本とした。

なお、それ以外の縮尺の場合はその都度、実測図に縮尺を明記した。

目 次

例 言

凡 例

目 次

I 調査の概要

1 調査の概要	1
2 試掘調査の方法	1

II 試掘調査（平成 26 年度）

1 尼寺ヶ原遺跡	4
2 幸町遺跡（第 2 地点）	4
3 常陸國衙跡	5
4 瓦谷（未周知）	7
5 外山遺跡	9
6 下林愛宕山遺跡（新発見）	9
7 鹿の子遺跡（第 52 次）	11
8 国分遺跡	12
9 須釜堀内遺跡（第 4 地点）	13
10 東成井（未周知）	15
11 茨城古墳	16
12 堂久保遺跡	18
13 鹿の子遺跡（第 53 次）	18
14 田崎遺跡（第 4 地点 - 2）	19
15 柿岡池下遺跡（第 1 地点 - 7）	20
16 鹿の子遺跡（第 54 次）	22
17 田崎遺跡（第 4 地点 - 3）	22
18 杉ノ井遺跡（第 9 地点）	22
19 槙堀遺跡	22
20 中津川遺跡	23
21 国分遺跡	25
22 鹿の子遺跡（第 55 次）	29
23 寝烟遺跡（第 2 地点）	30
24 尼寺ヶ原遺跡	30
25 木間塚遺跡（第 18 地点）	30
26 常陸國分寺跡	32
III 工事立会い	
1 根古屋古墳群	35
IV 小幡窯跡の概要と採集遺物	37

I 調査の概要

1 調査の概要

試掘調査は基本的には遺跡の範囲内を行うが、範囲外であっても現地踏査の結果、地形等から遺跡の存在する可能性があると判断した場合、または、開発面積が広大である場合には範囲外であっても試掘調査を行った。また、現地踏査を行った結果、アスファルトなどで覆われていて遺跡の現状が把握しきれなかったものに対しては、試掘調査を必ずしも行わず、工事立会いを行ったものもある。

2 試掘調査の方法

試掘調査は開発予定地内に数mの大きさのトレンチを設定し、重機（バックホー）及び人力により、地山上面まで掘り下げ、遺構の有無を確認した。遺構か否か判断が困難な場合は、サブトレンチを設定するなど一部精査を行い、遺構の確認をおこなった。また、遺跡の時期や性格を判断するため、遺構であっても、あえてサブトレンチを設定し、掘り下げた場合もある。遺物は表面採集、トレンチ覆土中出土、遺構出土にわけて取り上げた。

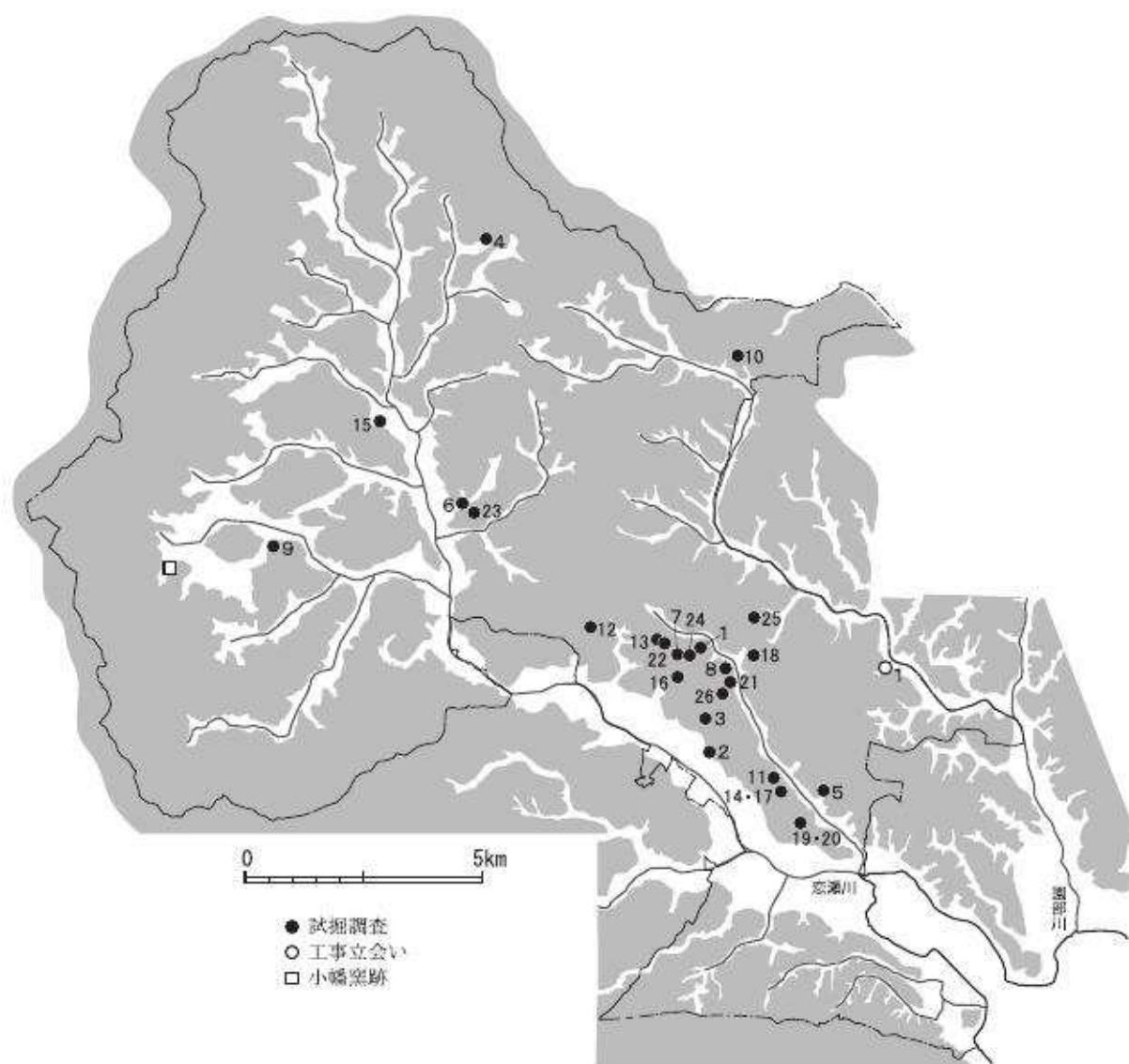


図1 本書所収の遺跡位置図

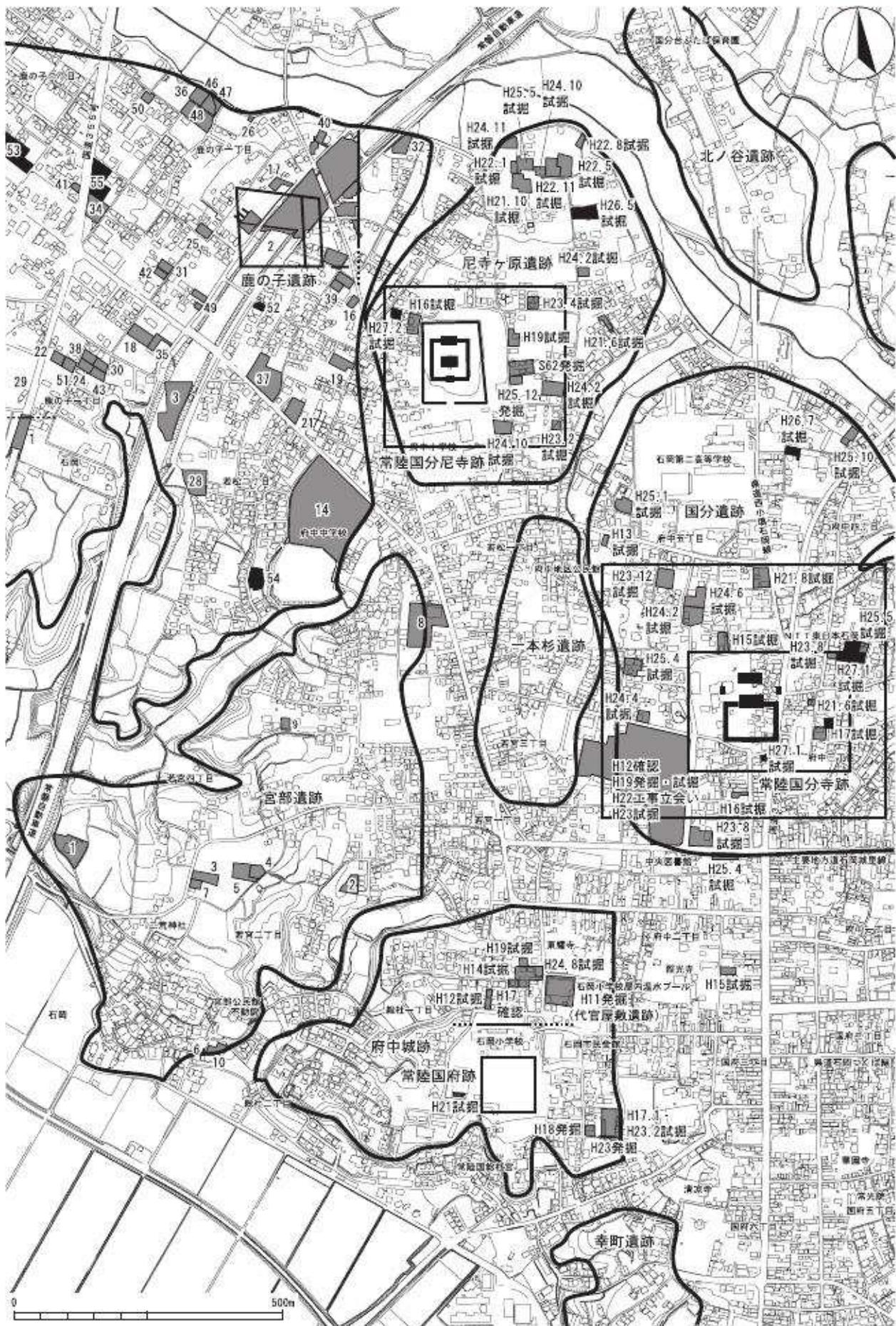


図2 常陸国衙跡・常陸国分寺跡・常陸国分尼寺跡ほか調査地点位置図 (S=1/10,000)

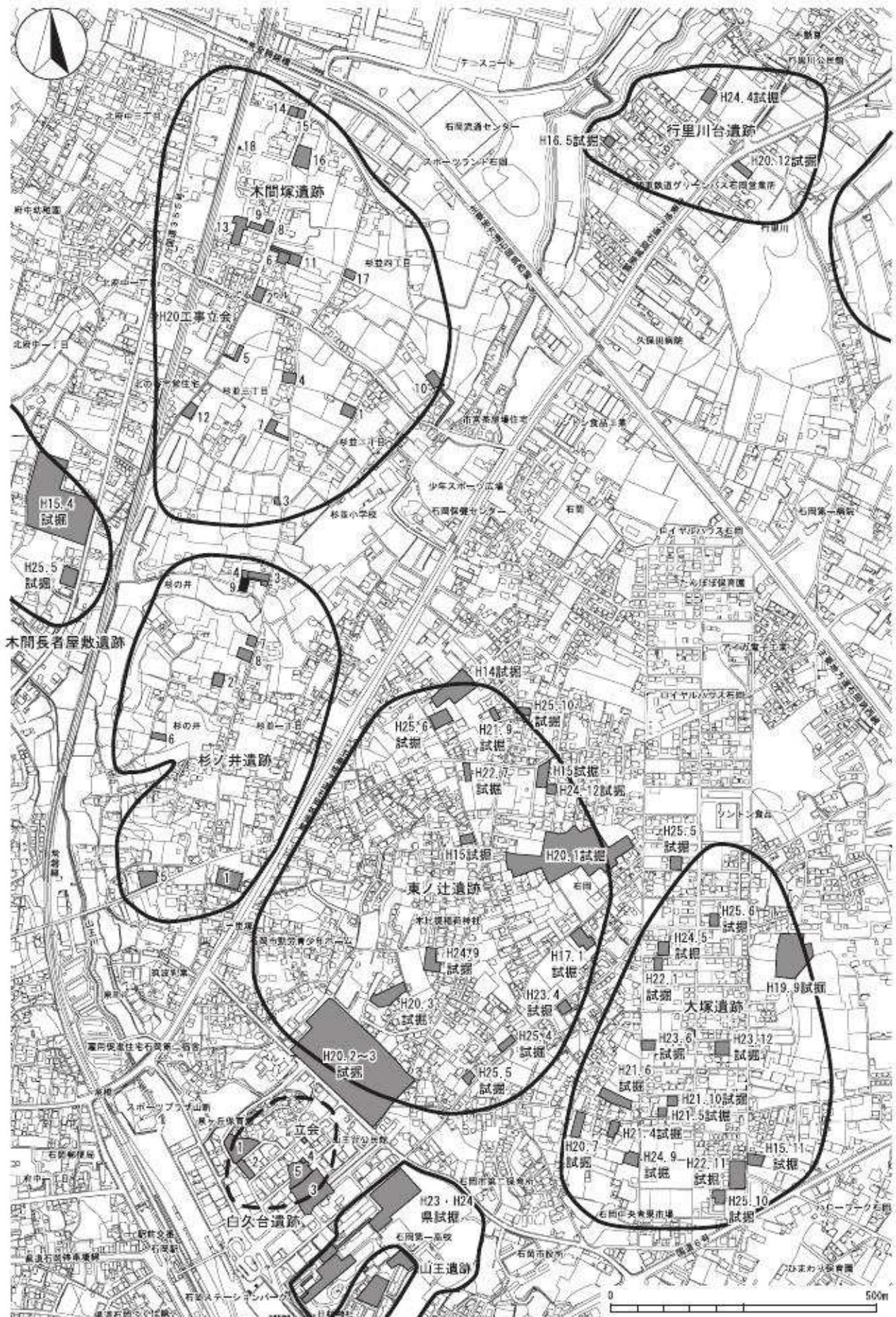


図3 木間塚遺跡・杉ノ井遺跡ほか調査地点位置図 (S=1/10,000)

II 試掘調査（平成 26 年度）

1 尼寺ヶ原遺跡

①所在地 石岡市若松3丁目8641番4 ②開発面積 1,072m² ③調査日 平成26年5月7日 ④調査原因 個人住宅建設 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発区域内に36ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、竪穴建物跡1棟(SI01)やピットを確認した。遺構確認面までの深さは中央部では0.2m前後、西端では0.4～0.5m程度。表土中から奈良・平安時代の土器(土師器・須恵器)・瓦、縄文土器が出土している。⑦遺物 奈良・平安時代の土器・瓦は小片のため図示できなかったことから、縄文土器のみを掲載する。

1は縄文土器。暗褐～黒褐色。白色粒(～中)多量、黒雲母(～中)・半透明粒(～中)を含む。T-16出土。

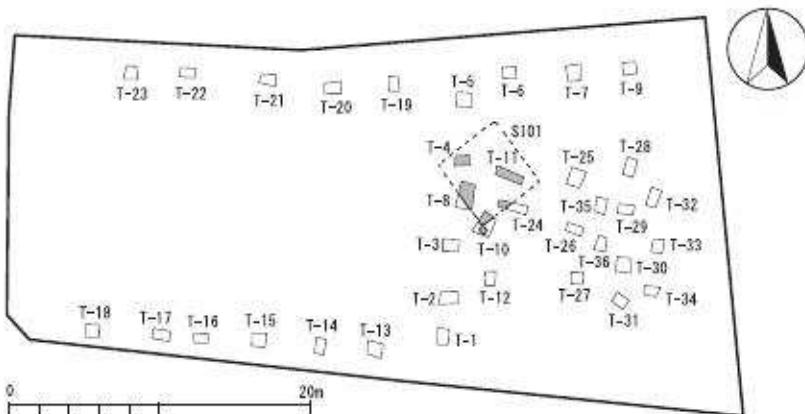


図4 尼寺ヶ原遺跡 全体図 (S=1/500)



図5 尼寺ヶ原遺跡
出土遺物 (S=1/3)



写真1 T-10 (北から)

2 幸町遺跡（第2地点）

①所在地 石岡市国府7丁目490番2ほか ②開発面積 438m² ③調査日 平成26年5月19日 ④調査原因 個人住宅建設 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発地は平成25年度に個人建設に伴い発掘調査を行った地点（第1地点）の北西側隣接地にあたる。第1地点では、奈良・平安時代の竪穴

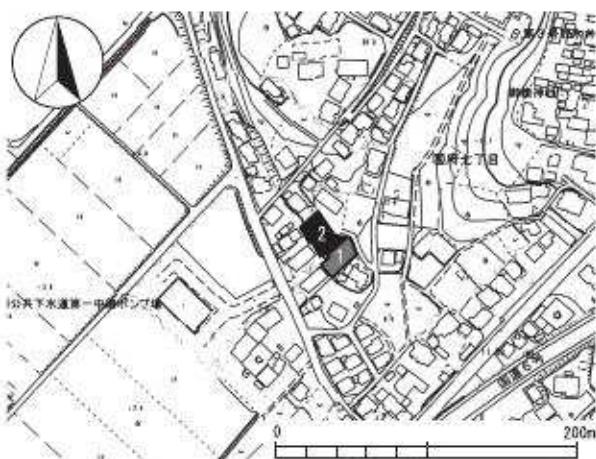


図6 幸町遺跡 調査地点位置図 (S=1/5,000)

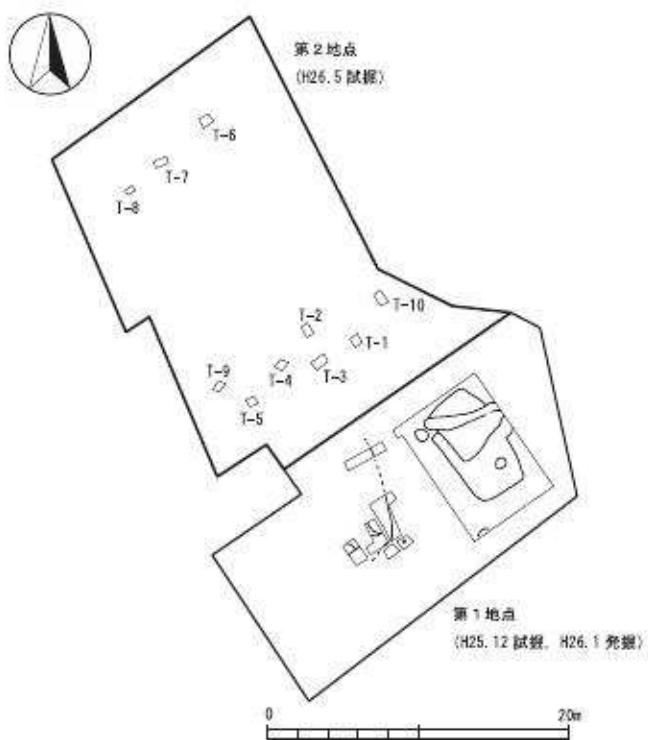


図7 幸町遺跡（第1・2地点） 全体図 (S=1/500)

建物跡や溝、土坑などを検出している。開発区域内に10ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、遺構は確認されなかった。地山確認面までの深さは0.45～0.65m。表土中から奈良・平安時代の土器（土師器・須恵器）・瓦が出土している。

3 常陸国衙跡

- ①所在地 石岡市総社1丁目420番 ②開発面積 80ml ③調査日 平成26年5月29日～6月11日 ④調査原因 県指定文化財「石岡の陣屋門」移設 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 県指定文化財「石岡の陣屋門」の移設に伴い、移設予定地に南北10m×東西2mの試掘トレーニングを重機にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、土坑6基、溝1条を確認した。土坑SK01・SK02および溝SD01については、時期や性格判断のための掘り下げを行った。その結果、SK01からは、江戸時代の擂鉢等が出土している。

SK01 試掘トレーニングの南側で確認した。辺
1.5m程度の不整方形。深さ0.1~0.2m。江戸
時代の擂鉢等(図10-1~3)や貝類、炭化物が
出土している。切り合い関係からSD01に後出
する。



写真2 調査風景

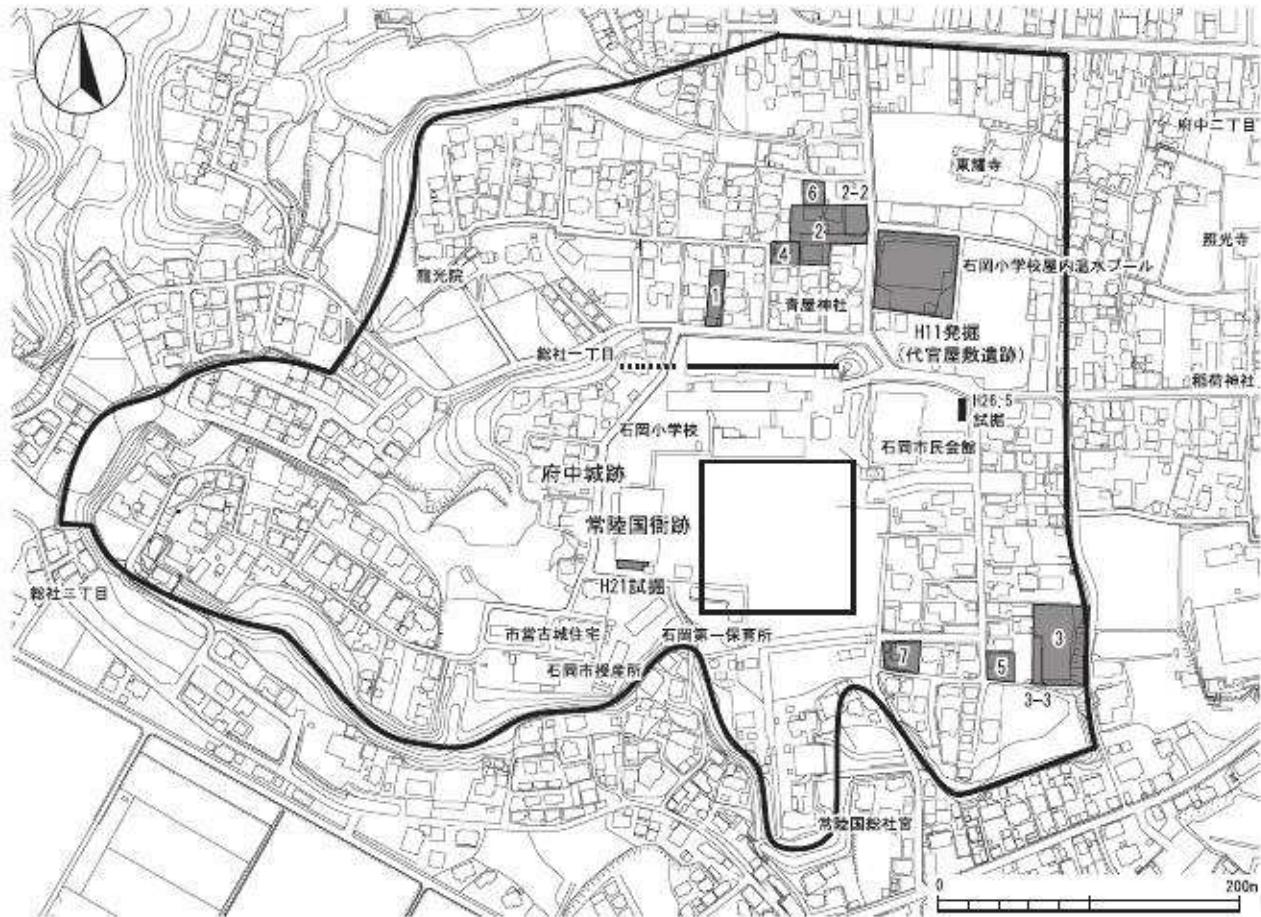


図8 常陸国衙跡・府中城跡 調査地点位置図 (S=1/5,000)

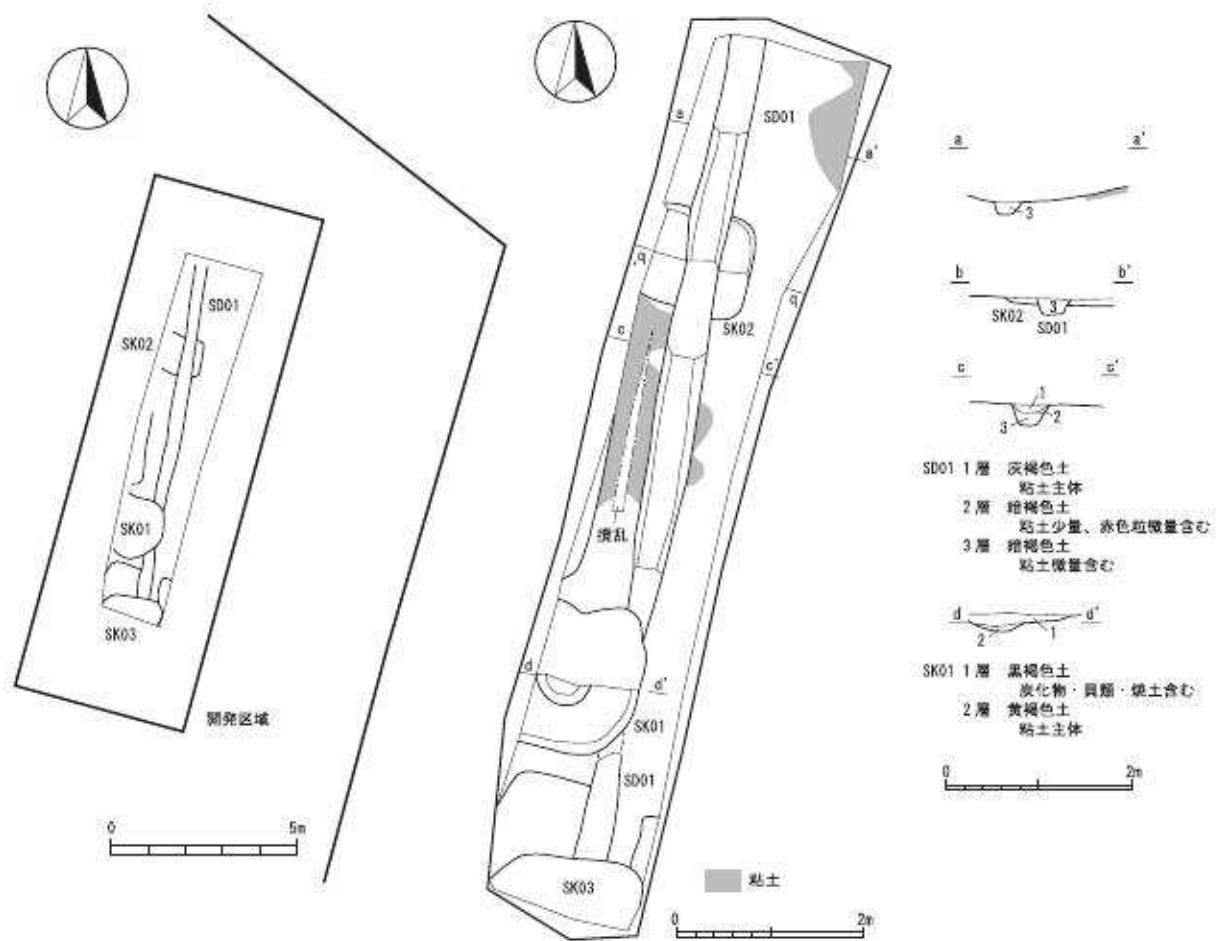


図9 常陸國衙跡 全体図 (S=1/200・1/80)



写真3 遺構確認状況（北から）



写真4 サブトレンチ掘削後（北から）



写真5 SK01確認状況（北西から）



写真6 SK01土層（南から）



写真7 SK02・SD01確認状況（北西から）



写真8 SK02・SD01土層（北から）



写真9 SD01土層（南から）

SK02 試掘トレンチの北側で確認した。辺1m程度の隅丸方形。深さ0.07m。遺物は出土していない。切り合い関係からSD01に先行する。

SD01 幅0.3～0.43mの南北方向の溝である。試掘トレンチを縦断する形で確認した。深さ0.13～0.22m。遺物は出土していない。切り合い関係から、SK01・03に先行し、SK02に後出する。

⑦遺物 1～3はSK01より出土した。1は擂鉢。口径310mm（復元）、器高118mm、底径140mm。黒色粒・白色粒少量、砂粒微量含む。焼成良好。75%残存。2は径150mm、厚さ13mm。にぶい褐～にぶい灰褐色。白色粒・白雲母少量、黒雲母・骨針微量含む。焼成良好。ほぼ完存。3は壺類の肩部か。にぶい褐～にぶい赤褐色。白色粒・黒雲母・砂粒、赤色粒少量含む。焼成良好。

4 瓦谷（未周知）

- ①所在地 石岡市瓦谷2794番 ②開発面積 35m² ③調査日 平成26年6月10日 ④調査原因 防火水槽設置 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発地は稲荷川北岸の微高地上に位置し、定光院の南側にあたる。開発区域内に2ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、埋没谷を確認した

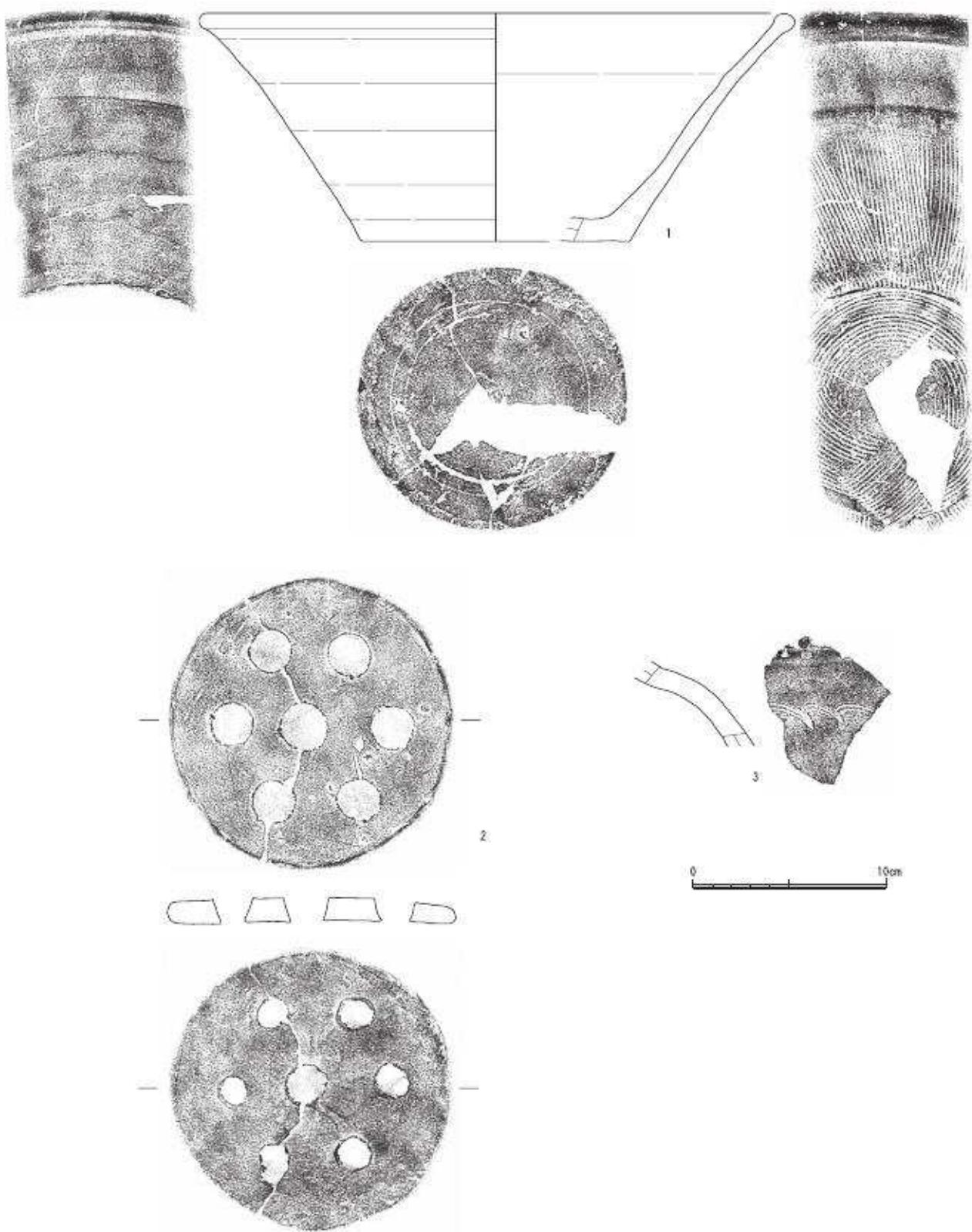


図 10 常陸國衙跡 出土遺物 (S=1/3)

が、遺構・遺物は確認されなかった。埋没谷の掘り下げを行ったところ、表土 0.7 ~ 1m において湧水が認められ、谷覆土からも遺物の出土はなかった。

⑦遺物 開発地およびその周辺で土師質土器や陶磁器を採集している。1 は土師質土器の皿。にぶい褐~褐色。白色粒 (~小)・半透明粒 (~中)・黄褐色粒 (~中)・赤色粒 (小)・黒色粒 (~小) 少量含む。

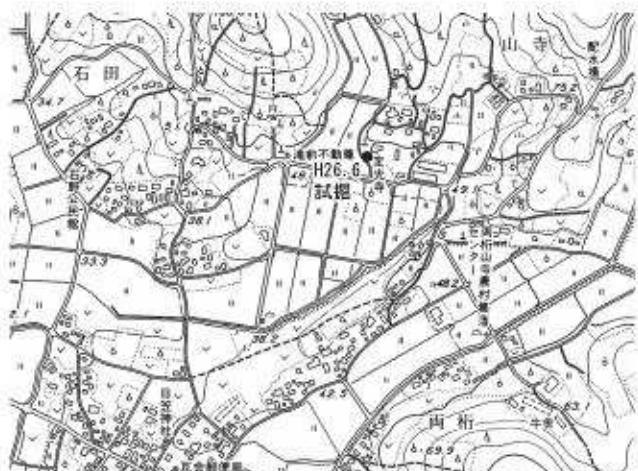


図 11 瓦谷 調査地点位置図 (S=1/15,000)



写真 10 瓦谷 調査風景

5 外山遺跡

①所在地 石岡市東田中字外山 1498 番 10 ②開発面積 35m² ③調査日 平成 26 年 6 月 11 日 ④調査原因 携帯電話基地局設置 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発区域内に 3ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、遺構・遺物は確認されなかった。ローム面までの深さは 0.36 ~ 0.42m。

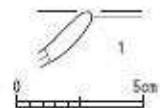


図 12 瓦谷
採集遺物 (S=1/3)

6 下林愛宕山遺跡（新発見）

①所在地 石岡市下林字愛宕山 603 番 2 ②開発面積 498m² ③調査日 平成 26 年 6 月 27 日 ④調査原因 個人住宅建設 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発区域内に 8ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、開発区域の南東側では埋没谷を、西側では竪穴建物跡 1 棟 (SI01) を確認した。遺構確認面までの深さは北側では 0.62m、南側では 0.9m。この結果を受け、平成 26 年 7 月 1 日付で「下林愛宕山遺跡」として「遺跡発見の通知」を茨城県教育委員会に提出した。下林愛宕山遺跡の西側には、平成 9 年に店舗建設に伴い発掘調査が行われた中溝遺跡が存在する。中溝遺跡では古墳時代終末期の古墳石室（五重古墳群）や、奈良・平安時代の竪穴建物跡が検出されたほか、古墳時代中期の土器も出土している（西宮 1997）。とともに台地縁辺部から微高地上に展開する遺跡であり、同一の遺跡として把握すべきものかもしれないが、現在両遺跡は県道 7 号線によって分断されていることから、便宜的に別遺跡とした。

SI01 T-6 および T-8 において確認した。全体の規模・形状等は不明だが、確認した北東辺が直線的であること、



写真 11 下林愛宕山遺跡 調査風景



写真 12 T-8 (南西から)

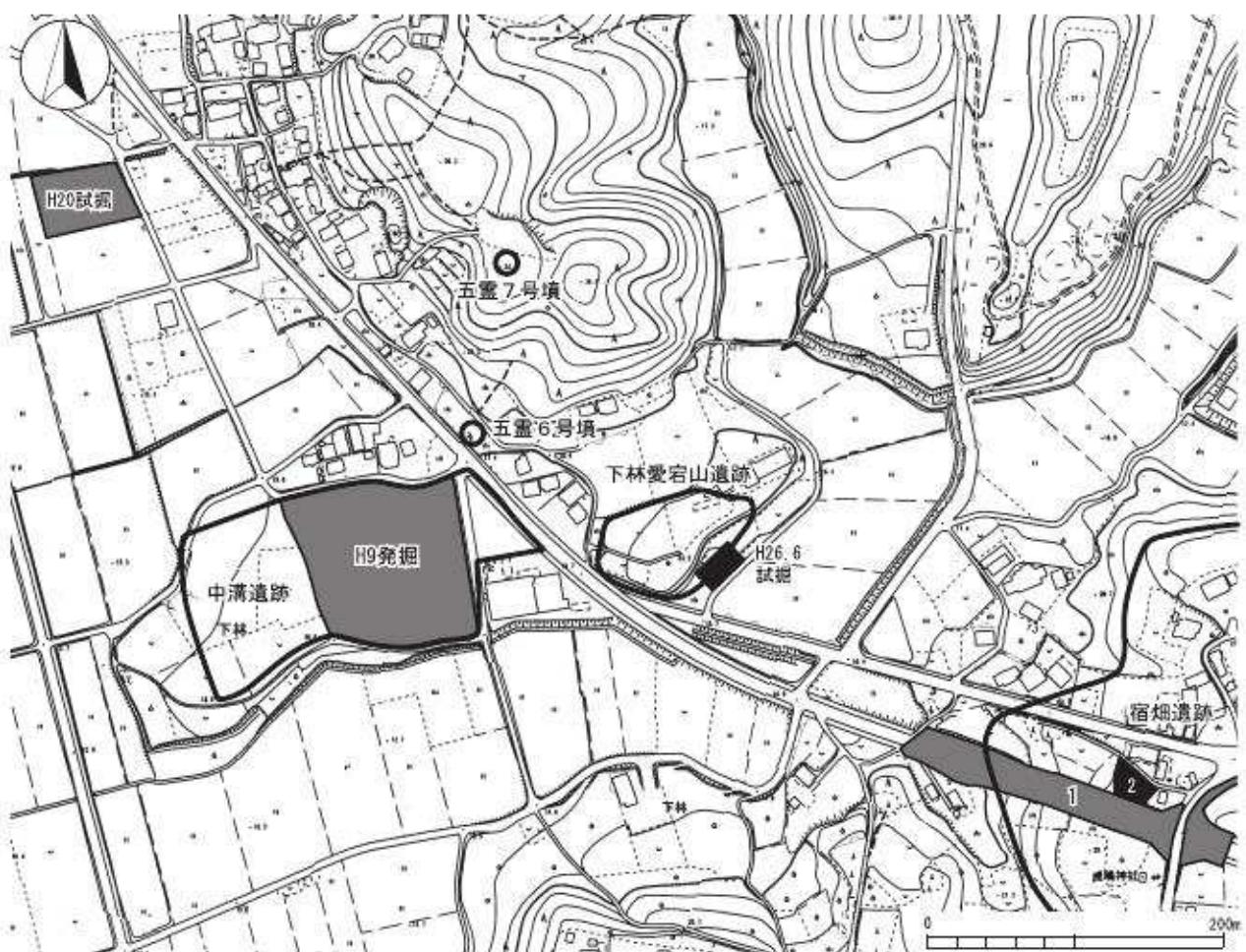


図 13 下林愛宕山遺跡 調査地点位置図 (S=1/5,000)

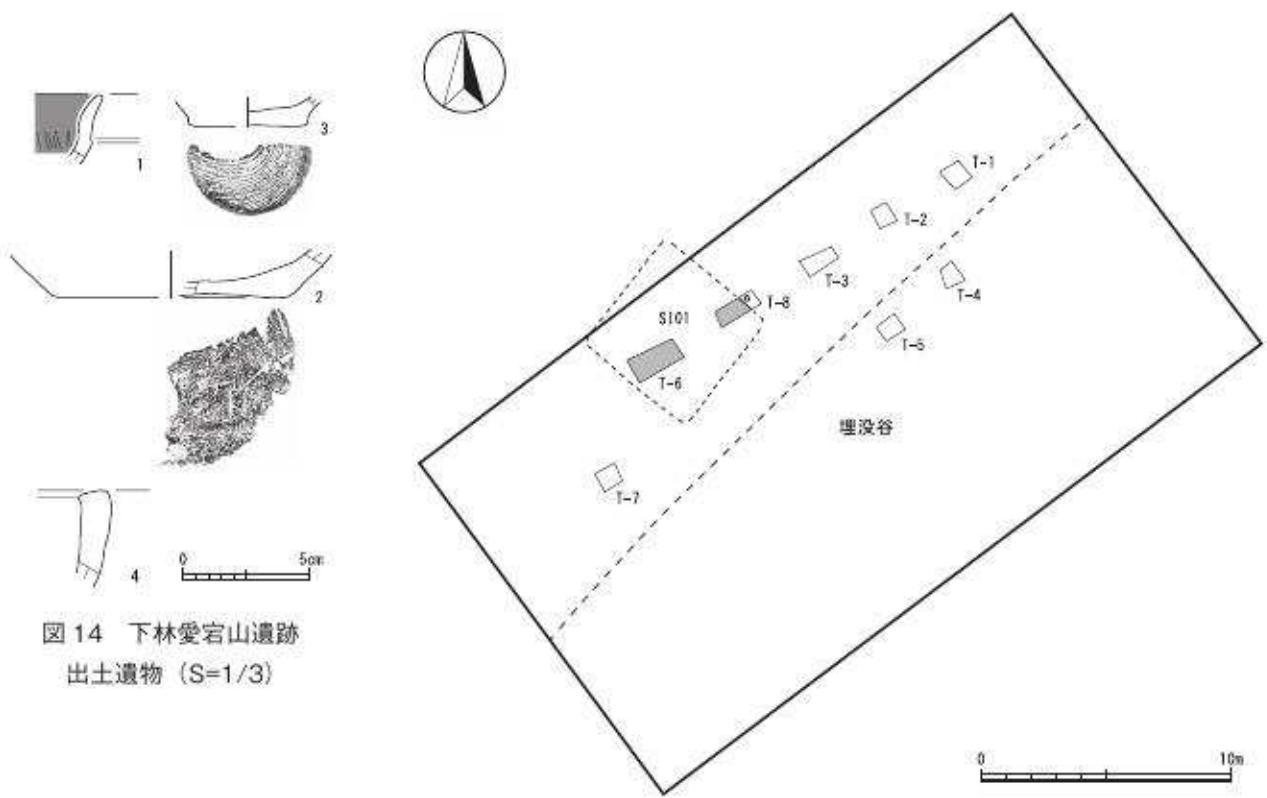


図 14 下林愛宕山遺跡
出土遺物 (S=1/3)

図 15 下林愛宕山遺跡 全体図 (S=1/300)

覆土に焼土や粘土を含んでいること、軸長が5m以上となることから、竪穴建物跡と判断した。該当するトレンチからは古墳時代後期の土師器（図14-1・2）が出土していることから、該期の所産と考えられる。

⑦遺物 1は土師器の杯。外面暗褐～にぶい褐色、内面黒褐～淡褐色。白色粒・黒色粒・黄褐色粒少量。胎土精良。焼成良好。T-6出土。2は土師器の壺。底径92mm。暗褐～橙褐色。白色物、黄褐色粒・黒色粒・白雲母少量含む。25%残存。T-6出土。3は土師質土器の皿。底径48mm。暗褐色。白雲母、白色粒少量、骨針・赤色粒微量。50%残存。T-8出土。4は土師質土器の鍋。暗褐色。黒雲母多量、白色粒・半透明粒、黄褐色粒少量含む。

<引用文献>西宮一男 1997「下林・中溝遺跡(付五塚古墳群)」

八郷町教育委員会

7 鹿の子遺跡（第52次）

①所在地 石岡市若松2丁目9255番1 ②開発面積

220m² ③調査日 平成26年7月1日～2日 ④調査原

因 個人住宅建設 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概

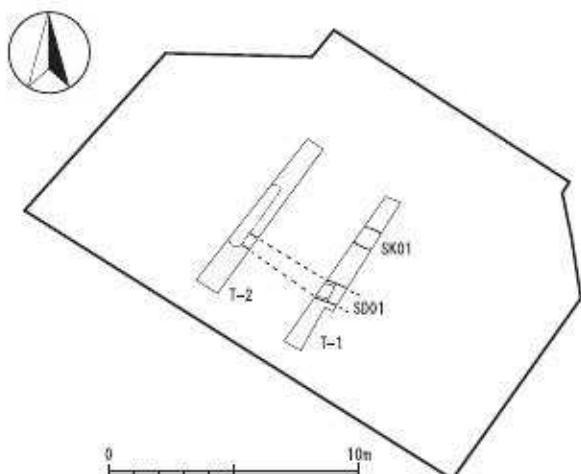


図16 鹿の子遺跡（第52次）全体図 (S=1/300)

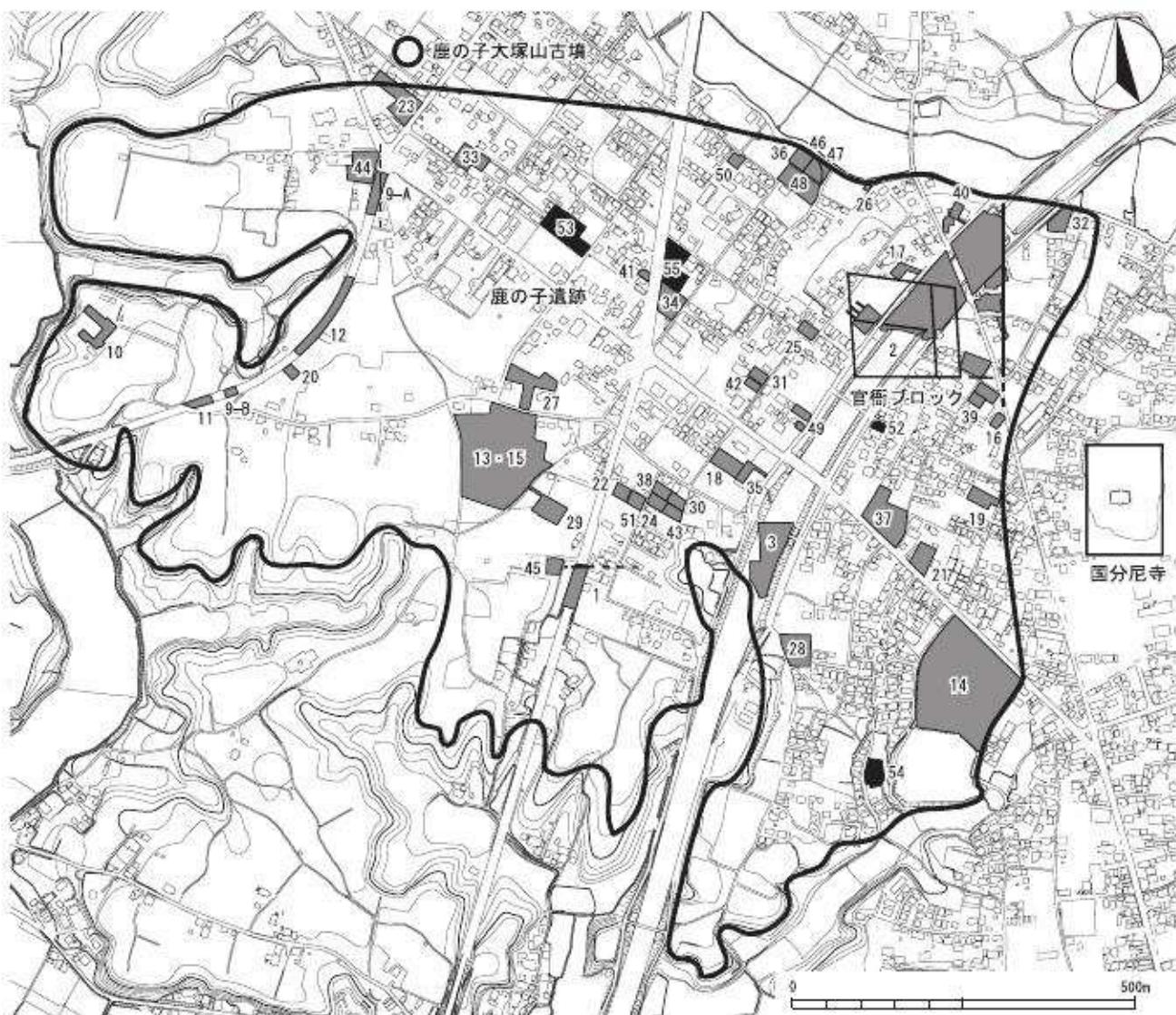


図17 鹿の子遺跡 調査地点位置図 (S=1/10,000)



写真14 T-1 SD01 土層

写真13 鹿の子遺跡（第52次）T-1（北から）

要 開発区域内に2ヶ所の試掘トレンチを重機にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、溝1条（SD01）、土坑1基（SK01）を確認した。遺構確認面までの深さは0.5～0.65m。SD01およびSK01の時期・性格把握のために掘り下げを行った。SD01は、幅0.6～0.8m、深さ0.25m。現在の土地区画と平行しており、地境の溝か。SK01は径0.8m、深さ0.15m程度。SD01・SK01ともに遺物の出土はなかった。

8 国分遺跡

①所在地 石岡市府中4丁目8358番4 ②開発面積 432m² ③調査日 平成26年7月8日 ④調査原因 個人住宅建設 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発区域内に2ヶ所の試掘トレンチを重機にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、堅穴建物跡3棟（SI01～03）を確認した。遺構確認面までの深さは、東側で0.4m、西側で0.6～0.8m程度。SI01とSI02は重複しており、SI02が先行する。SI01は辺2.6～2.8m程度の方形で、東壁にカマドが付設されている。SI02は辺4.5m程度の方形で、掘り下げたところ、床面および壁際溝を確認した。

⑦遺物 1は須恵器の杯。口径140mm（復元）。灰褐色～暗褐色。白雲母多量、白色物、黄褐色粒少量含む。新治産。25%残存。T-2出土。2は土師器の甕。口径135mm（復元）。白雲母・白色物・黒色粒少量、砂粒微量含む。20%残存。T-2出土。3は土師器の杯。淡褐色。

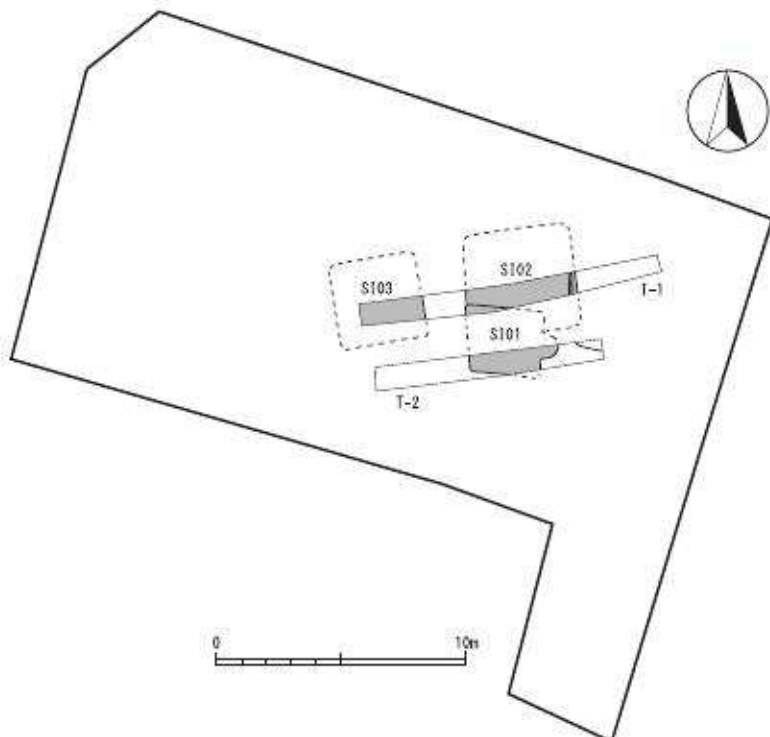


図18 国分遺跡 全体図 (S=1/300)

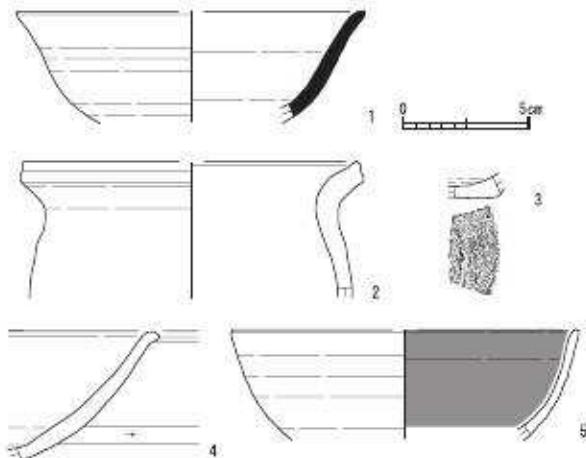


図 19 国分遺跡 出土遺物 (S=1/3)

白色粒、赤色粒、黒色粒、白雲母微量含む。焼成良好。4は土師器の椀。白雲母、黒色粒・白色粒少量含む。焼成良好。5は土師器の椀。白雲母、黒色粒少量、黄褐色粒・砂粒微量含む。内面ミガキ調整。3～5はT-1のSI01・02サブトレンチ出土。

9 須釜堀内遺跡（第4地点）

①所在地 石岡市須釜字堀内 1340番19 ②開発面積 495m² ③調査日 平成26年7月18日 ④調査原因 個人住宅建設 ⑤調査担当者 谷伸俊雄 ⑥調査概要 第1地点（平成18年度試掘、平成19年度発掘、小川2008）の東側、第2地点（平成26年2月試掘、谷伸2015）の南側隣接地にあたる。開発区域内に5ヶ所の試掘トレンチを重機にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、開発区域の北西端のT-1において、第1地点および第2地点で確認した竪穴建物跡SI06と考えられる遺構を確認した。しかし、T-1の中央部には擾乱が存



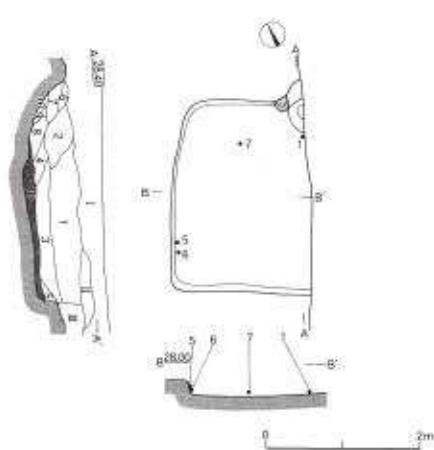
写真 15 T-2 SI02 (西から)



図 20 須釜堀内遺跡 調査地点位置 (S=1/5,000)



図 21 須釜堀内遺跡 SI06 (S=1/200・1/100)



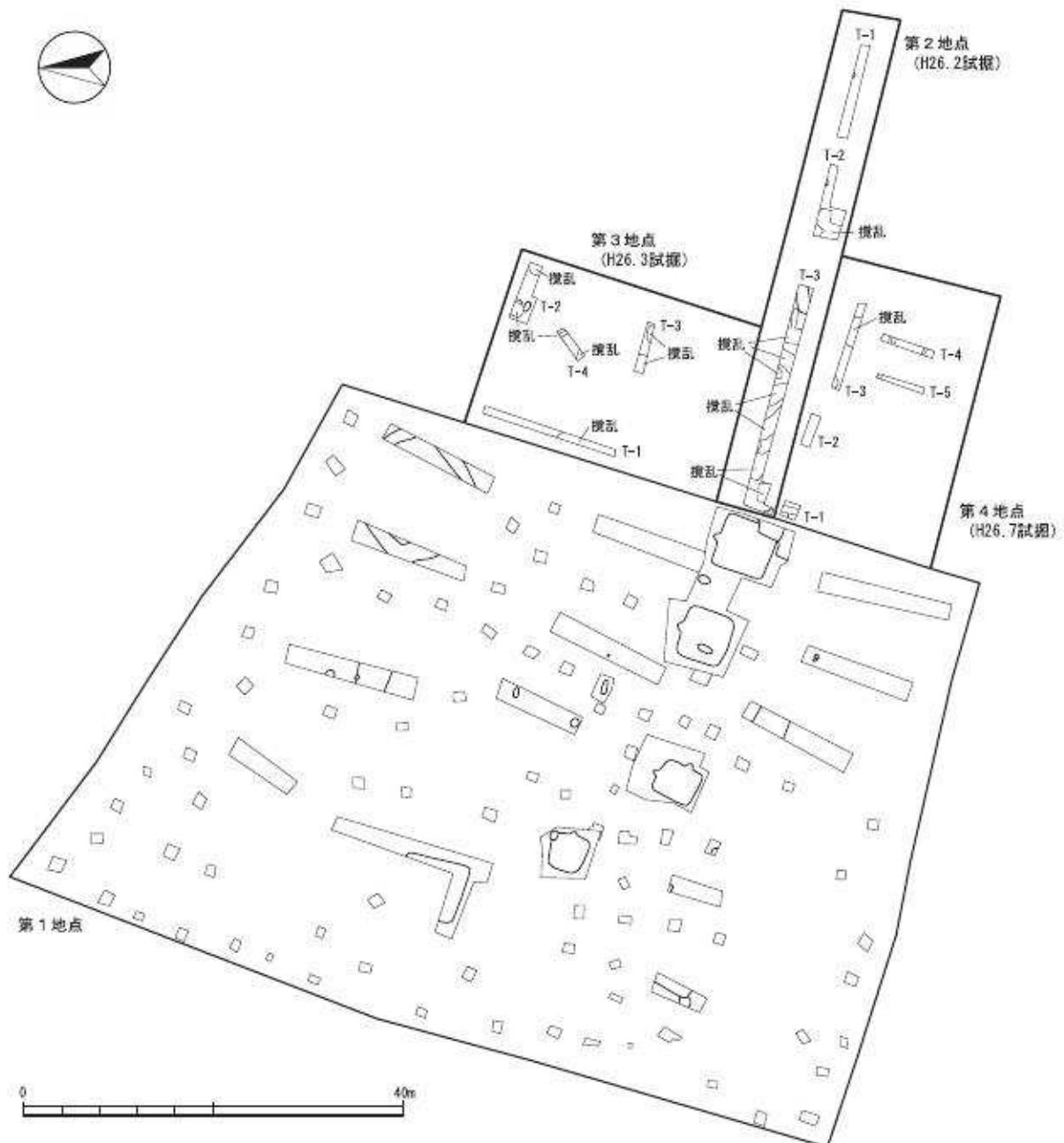


図22 須釜堀内遺跡（第1～4地点）全体図 (S=1/700)

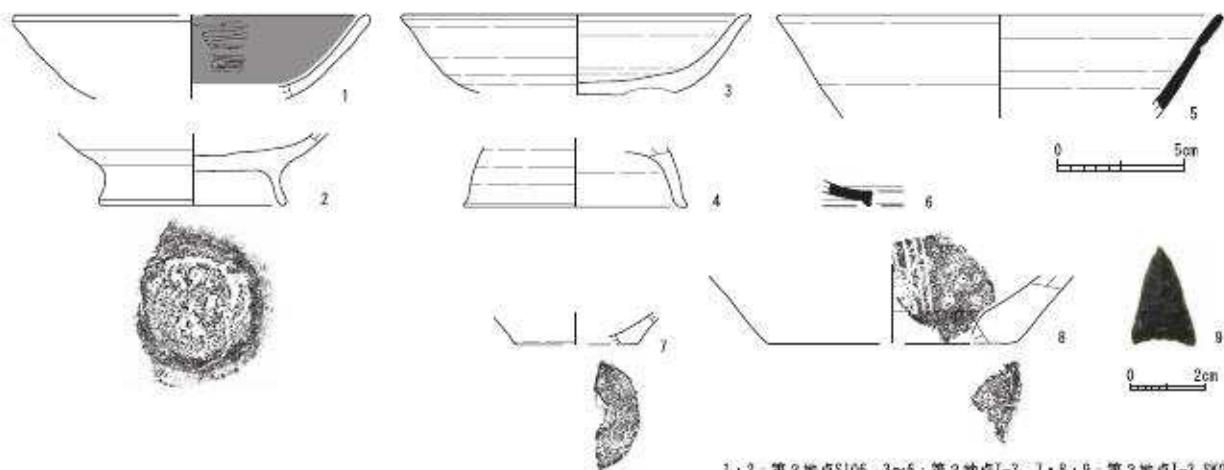
在しており、トレンチ壁面のみでの確認となった。

SI06 南北長2.5m、東西長2.8mの方形で、北壁にカマドが付設されている。第1地点では9世紀中葉の土器が出土している。

⑦遺物 第2～4地点の出土遺物を合わせて報告する。
1は土師器の椀。外面橙褐～にぶい褐色。内面黒色。白雲母、黒雲母・黑色粒少量、白色粒微量含む。焼成良好。20%残存。2は土師器の高台杯。にぶい褐～暗褐色。黒雲母、半透明粒・白雲母少量、砂粒・赤色粒微量含む。40%残存。1・2はSI06出土。3は土師器の高台杯。橙褐～にぶい褐色。白色粒・砂粒、黒雲



写真16 T-1 SI06 (南東から)



1・2：第2地点S106 3～6：第2地点T-3 7・8・9：第3地点T-2 SK01

図23 須釜堀内遺跡（第2～4地点）出土遺物（S=1/3）

母・白雲母少量含む。50%残存。4は土師器の高台杯。橙褐～にぶい褐色。白色粒・砂粒、黒雲母・白雲母少量含む。75%残存。3・4は同一個体か。5は須恵器の杯。灰色。白雲母・白色粒・砂粒少量、骨針微量含む。焼成良好。6は須恵器の蓋。灰～青灰色。白色粒・砂粒微量含む。3～6は第2地点 T-3 出土。7は土師質土器の皿。黒雲母多量、白色粒・黑色粒微量含む。35%残存。8は土師質土器の擂鉢。黒雲母・白色粒・砂粒多量。外面～底部煤付着。10%残存。9は石鎌。7～9は第3地点 T-2 SK01 出土。

<引用文献>

小川和博編 2008『須釜堀内遺跡発掘調査報告書』石岡市教育委員会・有限会社日考研茨城

谷仲俊雄 2015『市内遺跡調査報告書 第10集』石岡市教育委員会

10 東成井（未周知）

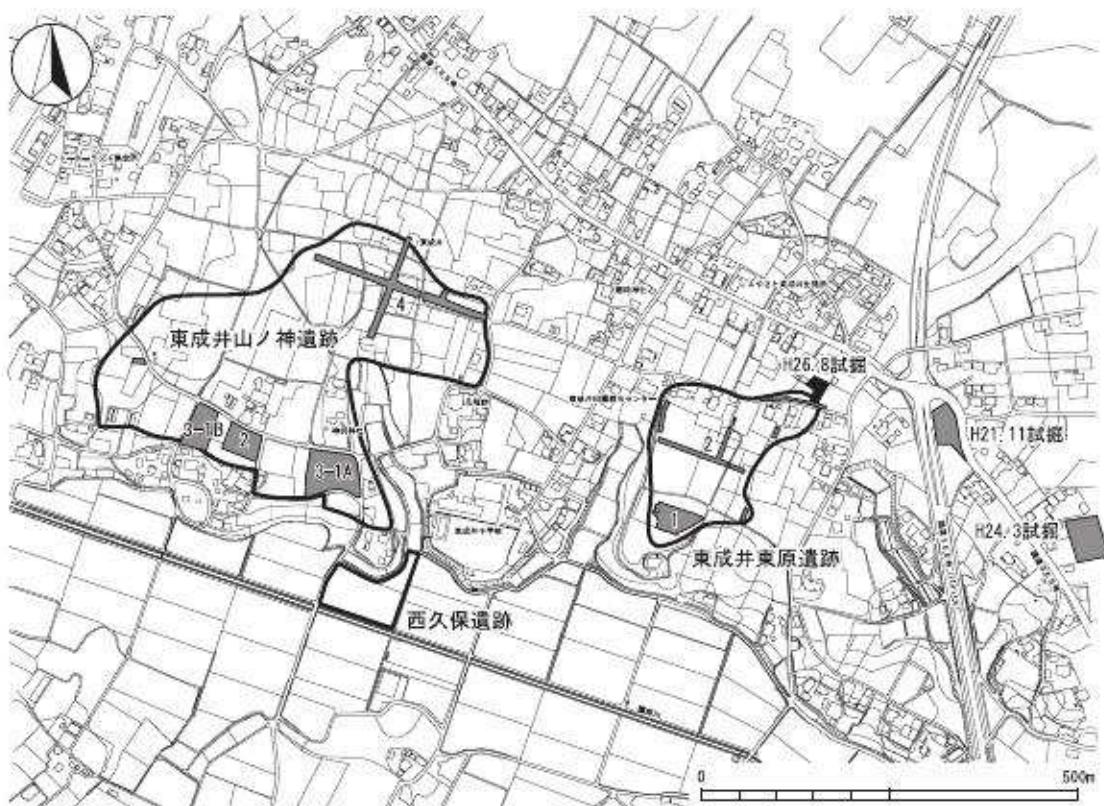


図24 東成井 調査地点位置図 (S=1/10,000)

①所在地 石岡市東成井 1577 番 1 ②開
 発面積 499m² ③調査日 平成 26 年 8 月
 5 日 ④調査原因 個人住宅建設 ⑤調査
 担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発区域
 内に 7 ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定
 し、遺跡の有無を確認した。その結果、開
 発区域の東端で溝 1 条 (SD01) を確認し
 た。遺構確認面までの深さは 0.35 ~ 0.7m。
 SD01 は幅 0.8 ~ 1m 程度で、時期・性格
 把握のために掘り下げたが、遺物は出土し
 なかった。深さは 0.35m 程度。

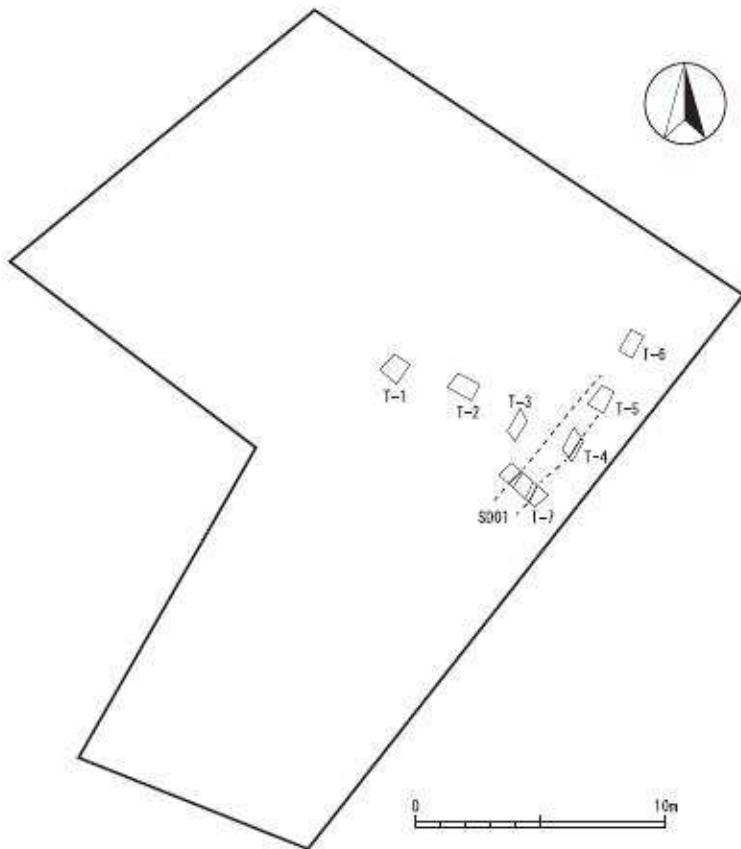


図 25 東成井 全体図 (S=1/300)

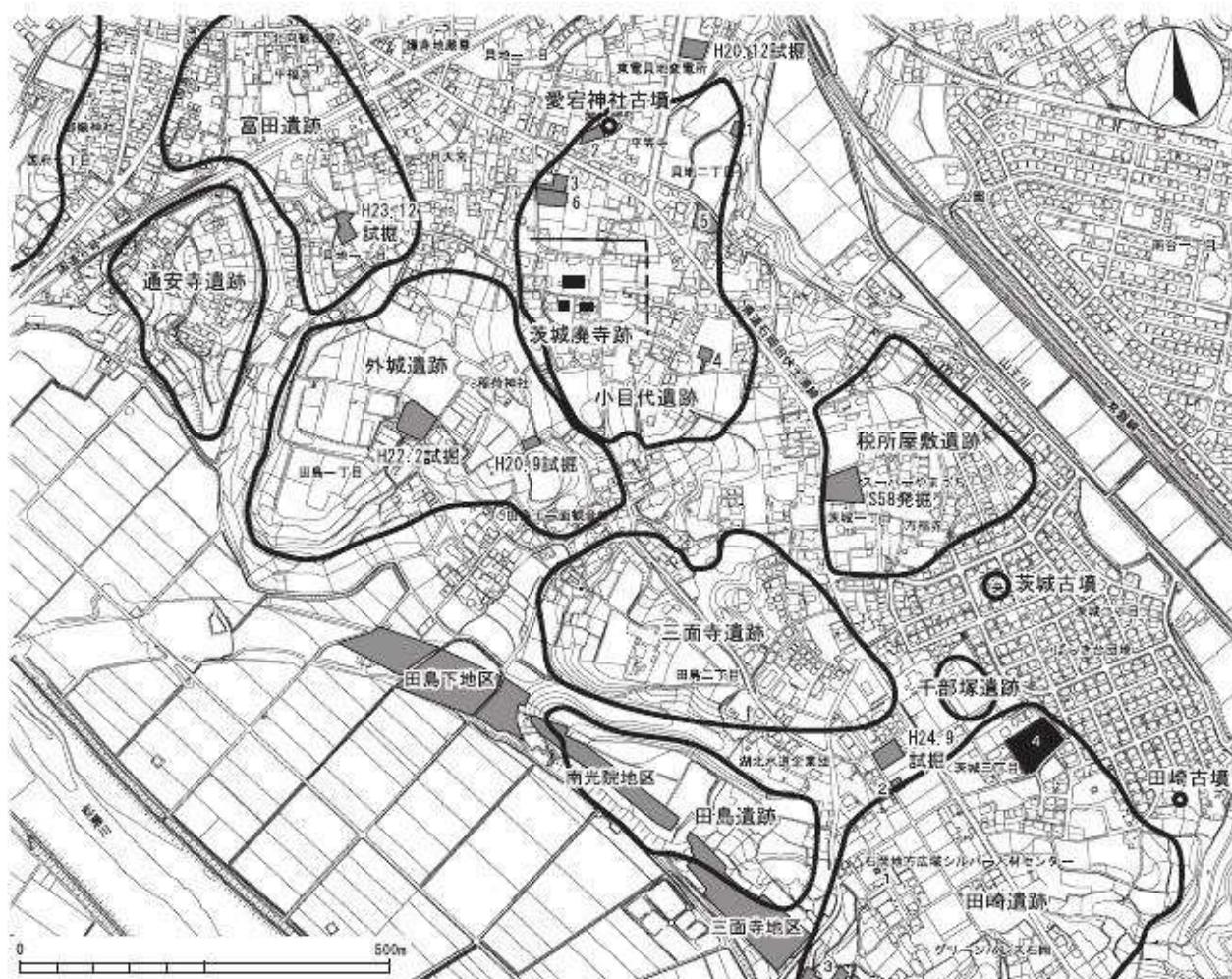


図 26 茨城古墳・田崎遺跡 調査地点位置図 (S=1/10,000)

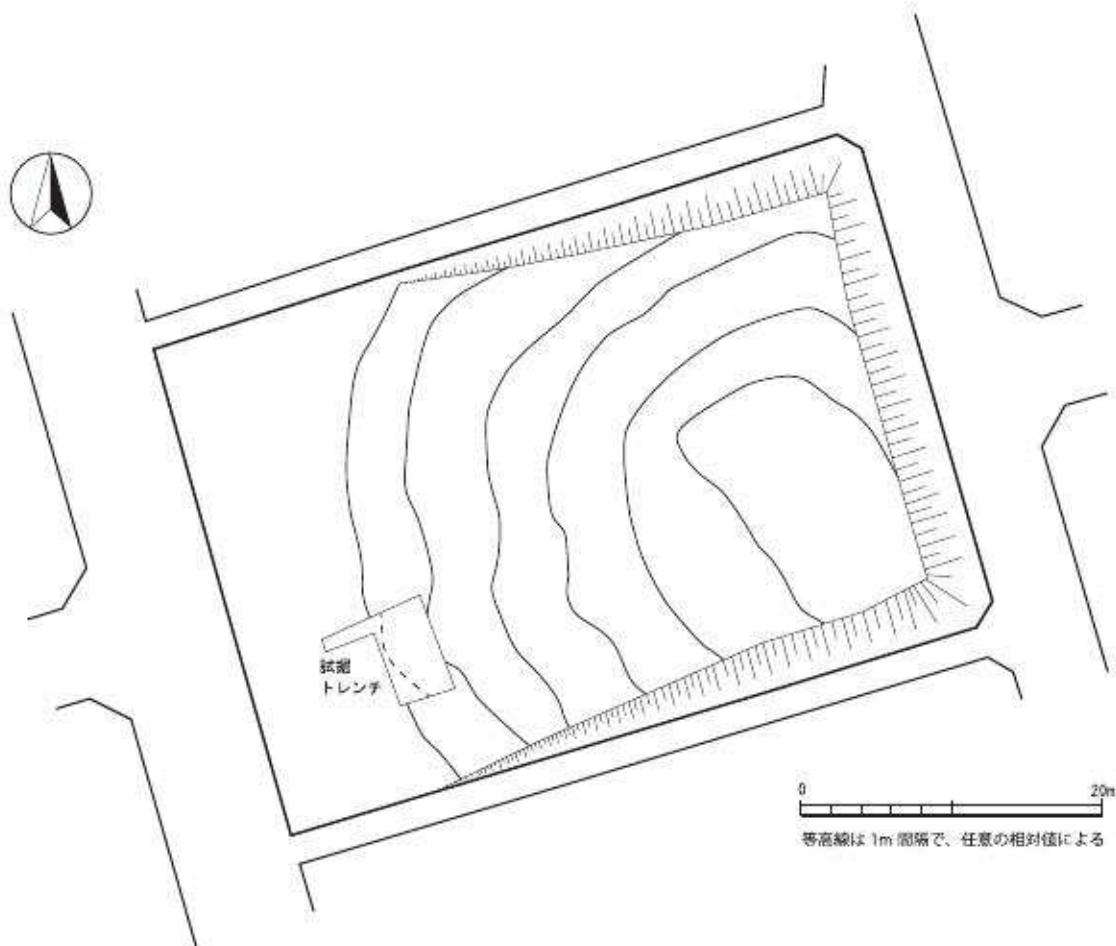


図 27 茨城古墳 全体図 (S=1/500)



写真 17 茨城古墳 全景 (南西から)



写真 18 調査風景

たり、周溝等の付属施設の存在する可能性があることから試掘調査を行った。開発区域内に $7m \times 1m$ の試掘試掘トレンチを重機にて設定し掘り下げたところ、表土（芝生）直下において粘土層を確認した。粘土層は、茨城古墳にむかって高くなっていることから、茨城古墳の墳丘を構成する土層の可能性が考えられた。そこで、調査区を南側に 5m 程度拡張し、面的に確認することとした。その結果、粘土層の立ち上がる傾斜変換を現況の墳丘に沿って確認したことから、この傾斜変換を茨城古墳の墳裾と判断した。粘土層については、墳丘を構築する人為的な盛土層か、自然の地山かの 2 通りの可能性が考えられた。平面からは判断することができなかったことから、サブトレンチを設定し断ち割りを行ったところ、自然の地山と判断した。したがって、茨城古墳の下部は地山の粘土

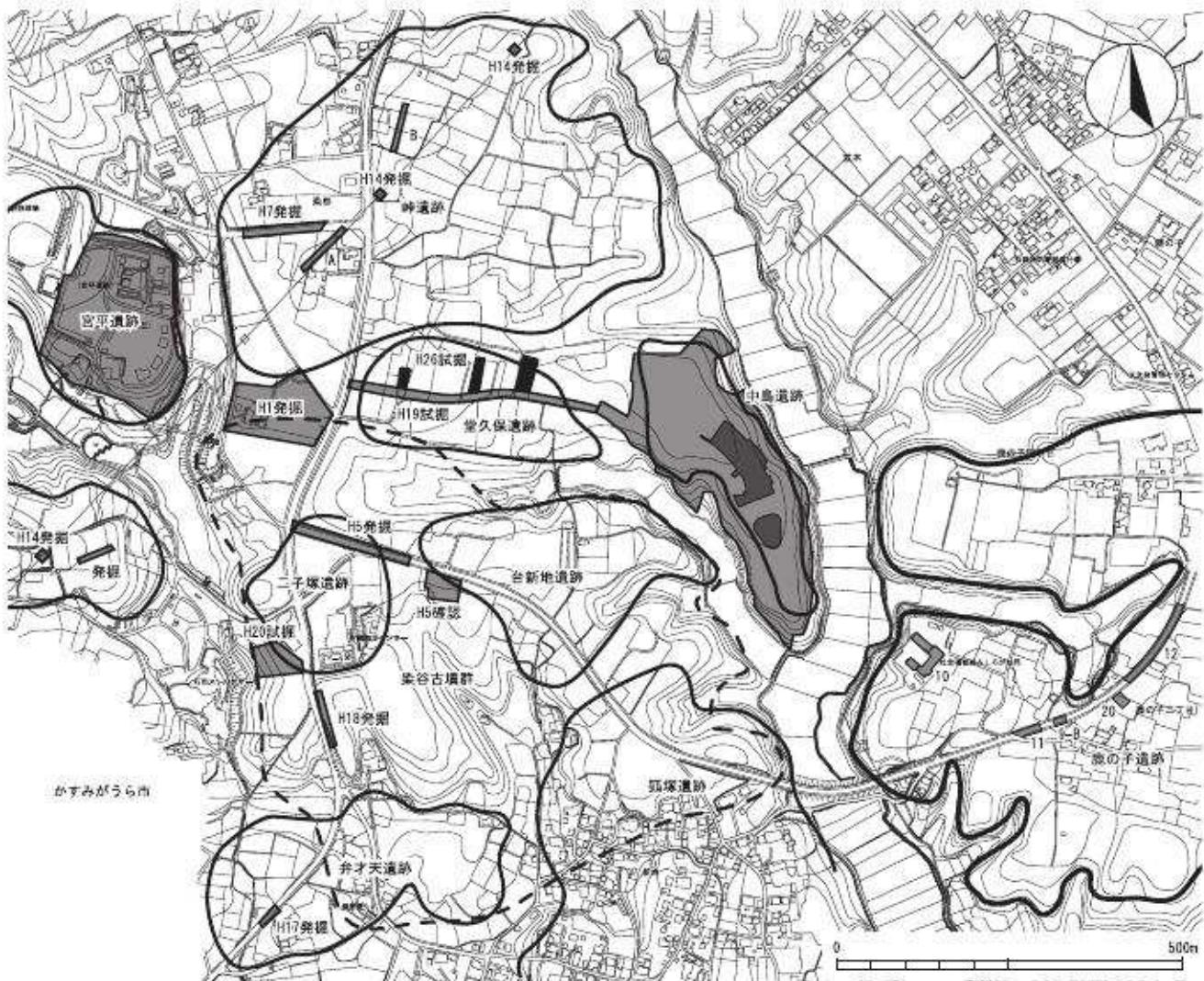


図 28 堂久保遺跡 調査地点位置図 (S=1/10,000)

層を削り出すことで構築していると判断できる。周溝については、トレンチの平面およびサブトレンチの土層断面において存否を検証したが、確認できなかった。遺物の出土もなかった。

12 堂久保遺跡

①所在地 石岡市染谷 1694 番 4 ほか ②開発面積 52,458 m² ③調査日 平成 26 年 8 月 22 日
 ④調査原因 太陽光発電施設設置 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発区域内のうち、地形から遺跡の存在する可能性が考えられた地点や、調査条件の整った地点に 5ヶ所の試掘トレントを重機にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、遺構・遺物は確認されなかった。ローム面までの深さは 0.3 ~ 0.4m 程度。

13 鹿の子遺跡（第 53 次）

①所在地 石岡市鹿の子 2 丁目 9630 番、9631 番 1



写真 19 鹿の子遺跡（第 53 次） 全景（西から）

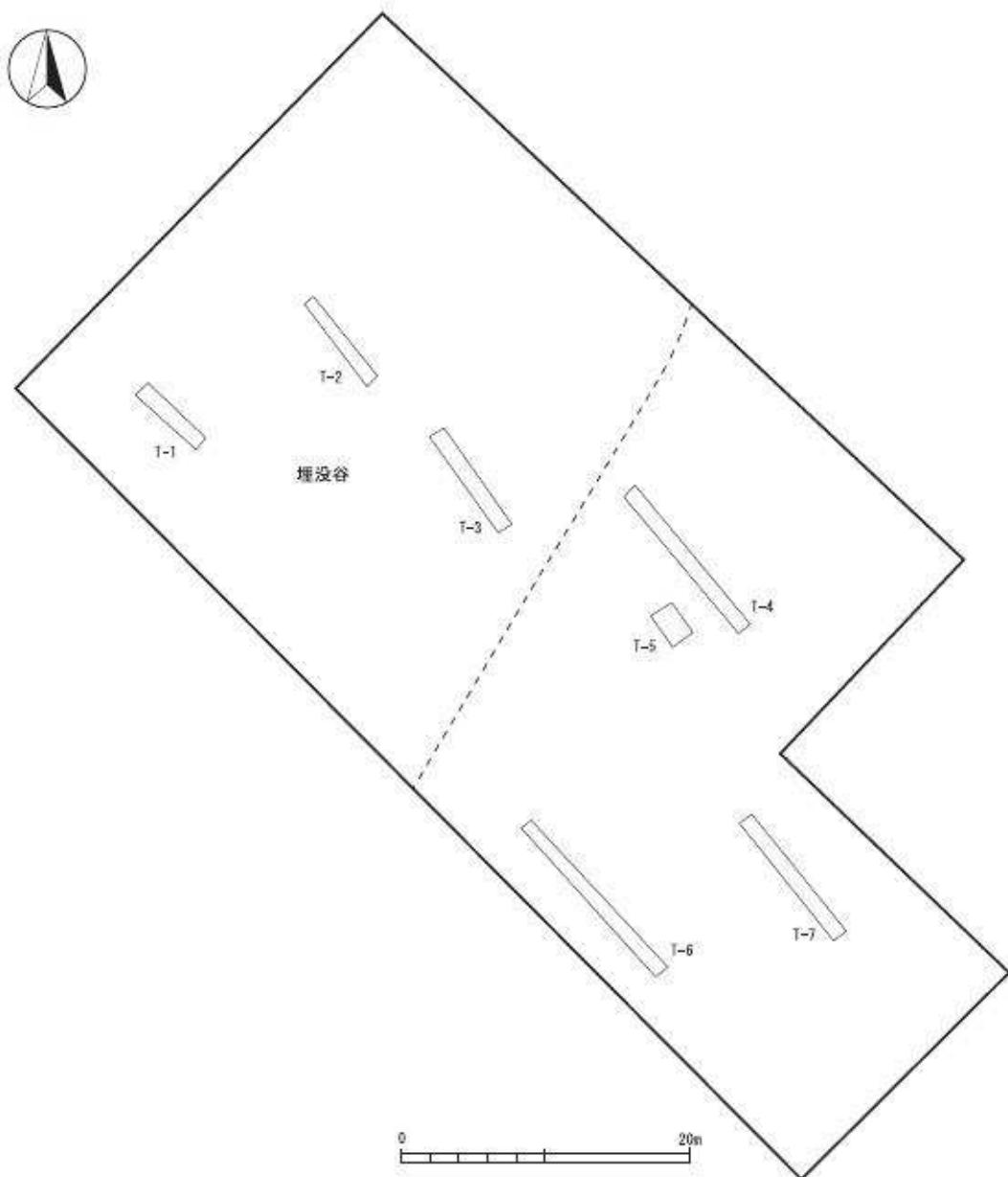


図29 鹿の子遺跡（第53次）全体図 (S=1/500)

②開発面積 2,400m² ③調査日 平成26年8月29日 ④調査原因 老人福祉施設建設
 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発区域内に7ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、開発区域の西側で埋没谷を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。ローム面までの深さは、中央部では0.65m、東側では0.35m程度。
 ⑦遺物 1は縄文土器。外面暗褐色、内面にぶい褐色。白色粒・黄褐色粒・黒色物少量、黒雲母微量含む。表面採集。



図30 出土遺物
(S=1/3)

14 田崎遺跡（第4地点－2）

①所在地 石岡市茨城3丁目143771番1の一部 ②開発面積 264m² ③調査日 平成26年9月30日 ④調査原因 個人住宅建設 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発地およびその周辺は宅地造成に伴う試掘調査を平成25年2～3月、6月に行い、中世の土坑などを確認している（第4地点）。個人住宅建設に伴い、開発区域内に4ヶ所の試掘トレンチを重機にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、開発区域の南側で埋没谷を

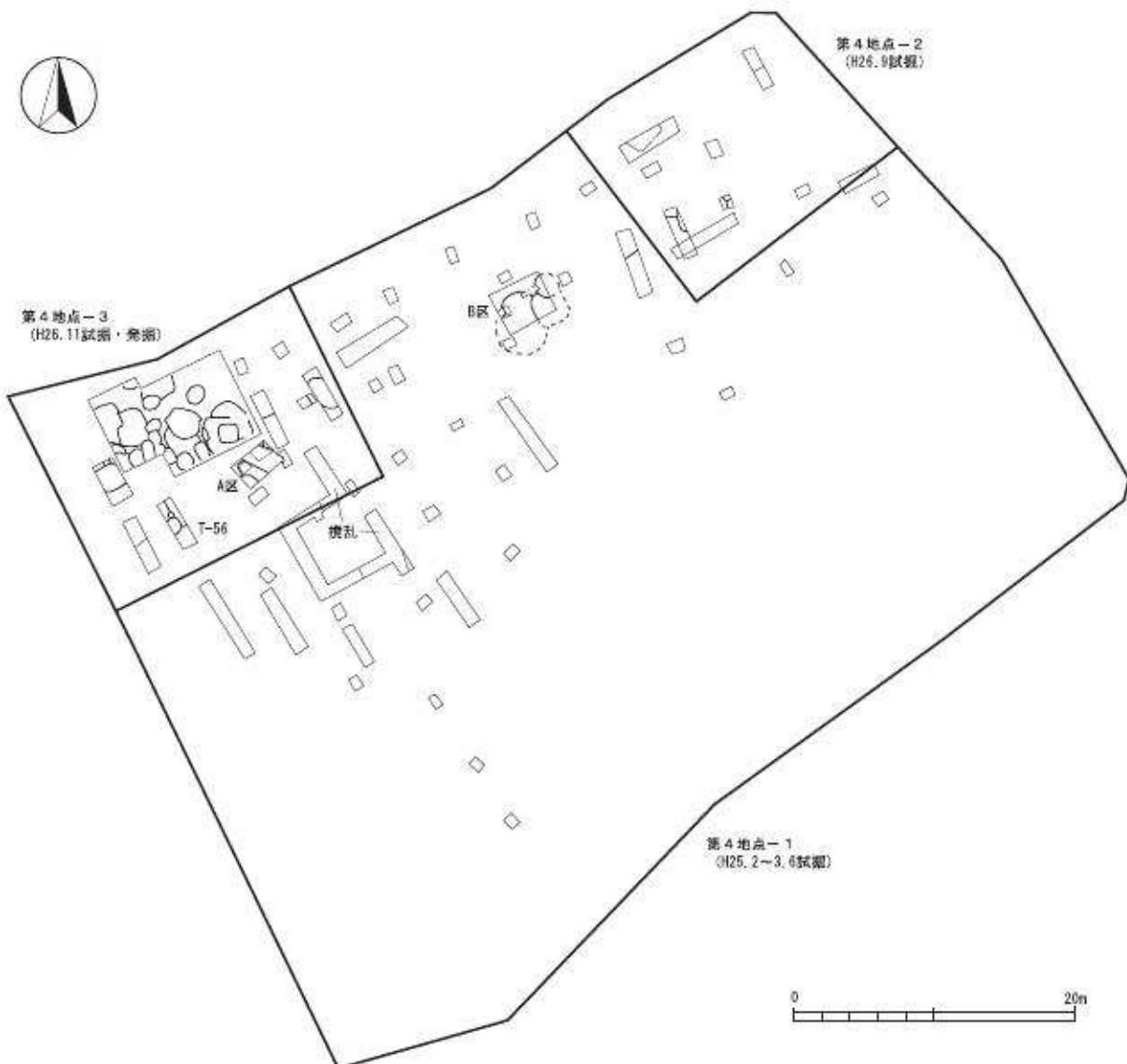


図 31 田崎遺跡 全体図 (S=1/500)

確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。ローム面までの深さは 0.1 ~ 0.35m 程度。

15 柿岡池下遺跡（第 1 地点 - 7）

①所在地 石岡市柿岡字池下 3023 番 14 ②開発面積 262m² ③調査日 平成 26 年 10 月 24 日 ④調査原因
個人住宅建設 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発地およびその周辺は平成 17 年度に宅地造成に伴う
試掘調査により遺跡が確認され（第 1 地点、小杉山 2006）、道路部分については平成 18 年度に発掘調査を実施し、
古墳時代中期の竪穴建物跡 1 棟などが検出されている（第 1 地点-1、小川・小杉山 2007）。また、個人住宅建設
部分についても、試掘・発掘調査を実施し、古墳時代後期の竪穴建物跡 1 棟などを検出している（図 34、第 1
地点-2 ~ 6、小杉山・曾根 2011・2012・2013、谷仲 2015）。

個人住宅建設に伴い、開発区域内に 1 ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、埋没谷を確認したが、遺構は確認されなかった。

⑦遺物 1 は土師質土器の皿。橙褐色。黒雲母・黒色粒少量、白色粒・赤色粒微量含む。T-1 出土。

<引用文献>

小杉山大輔 2006 『石岡市内遺跡調査報告書』石岡市教育委員会

小川和博・小杉山大輔 2007『柿岡池下遺跡 発掘調査報告書』石岡市教育委員会・日考研茨城

小杉山大輔・曾根俊雄 2011『市内遺跡調査報告書 第6集』石岡市教育委員会

小杉山大輔・曾根俊雄 2012『市内遺跡調査報告書 第7集』石岡市教育委員会

小杉山大輔・曾根俊雄 2013「市内遺跡調査報告書 第8集」石岡市教育委員会

谷仲俊雄 2015「市内遺跡調査報告書 第10集」石岡市教育委員会

図32 出土遺物

(S=1/3)

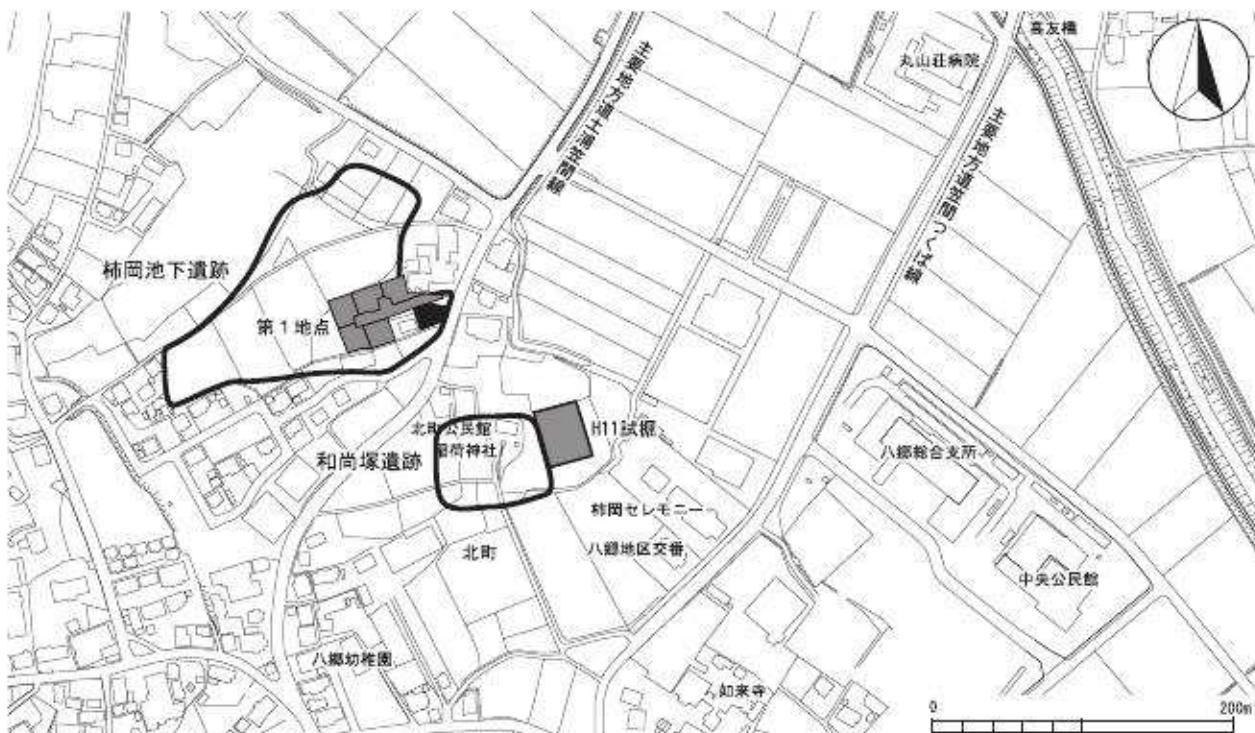


図33 柿岡池下遺跡 調査地点位置図 (S=1/5,000)

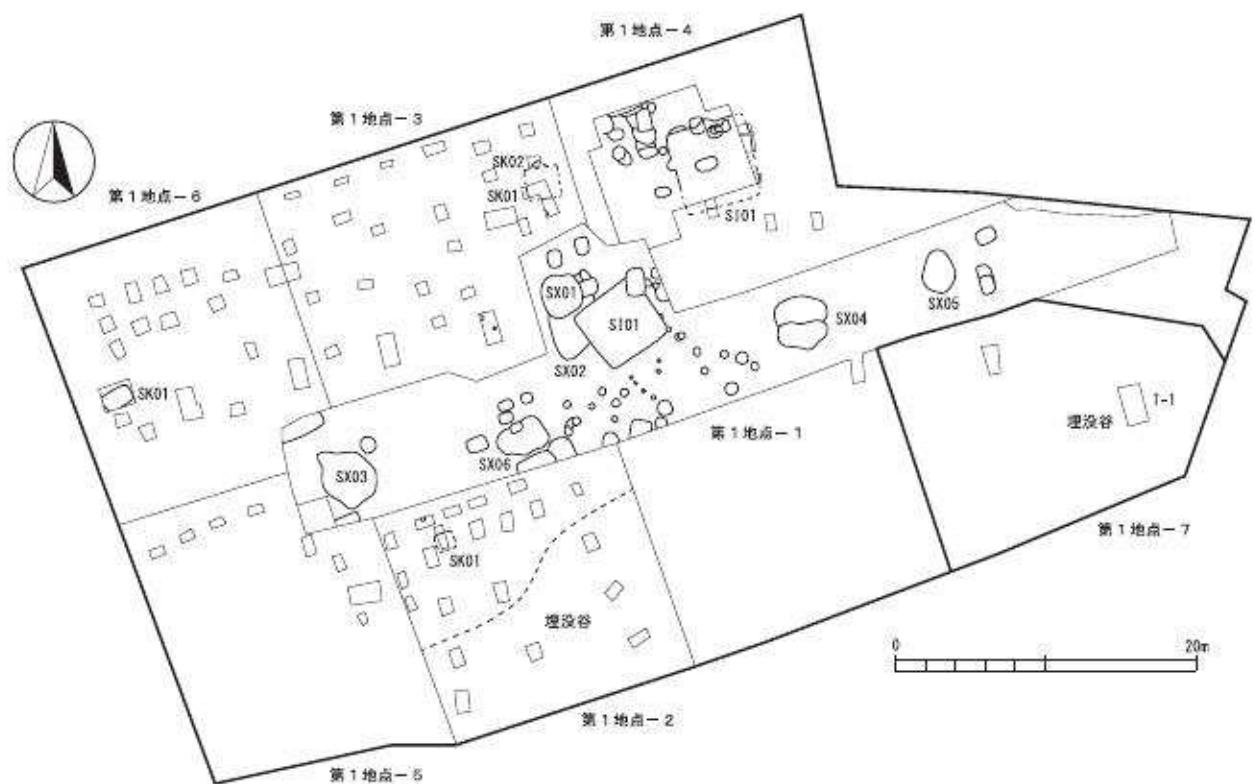


図34 柿岡池下遺跡（第1地点）全体図（S=1/500）

16 鹿の子遺跡（第54次）

- ①所在地 石岡市若松2丁目9085番1 ②開発面積 963m²
③調査日 平成26年10月27日 ④調査原因 建売住宅分譲
⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発区域内に4ヶ所の試掘トレンチを重機にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、各トレンチにおいて埋没谷を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。

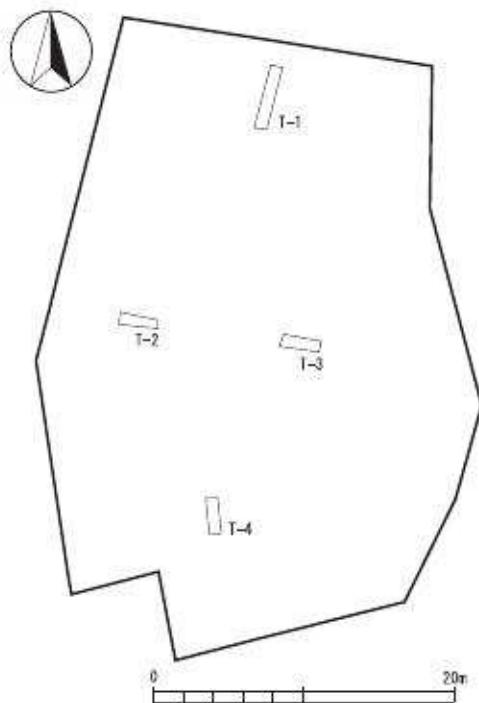


図35 鹿の子遺跡（第54次）

全体図 (S=1/500)

17 田崎遺跡（第4地点-3）

- ①所在地 石岡市茨城3丁目14377番4 ②開発面積 319m²
③調査日 平成26年11月5日 ④調査原因 個人住宅建設
⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発地は平成25年2～3月、6月に試掘調査を行い、中世の土坑などを確認している（第4地点）。個人住宅建設に伴い、開発区域内に1ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、中世の土坑などを確認した（図31）。この開発に伴い、平成26年度に発掘調査を実施しており、詳細は発掘調査報告書にて報告する。

18 杉ノ井遺跡（第9地点）

- ①所在地 石岡市杉並3丁目12590番2 ②開発面積 486m² ③調査日 平成26年12月8日 ④調査原因 個人住宅建設
⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発区域内に9ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、遺構は確認されなかった。ローム面までの深さは、0.6～0.75m程度。

19 横堀遺跡

- ①所在地 石岡市中津川128番 ②開発面積 590m² ③調査日 平成26年12月16日 ④調査原因 太陽光発電事業
⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発地は、県史跡府中愛宕山古墳の周塚（諸星・松本1980）の隣接地にあたる。開発区域内に3ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、遺構・遺物は

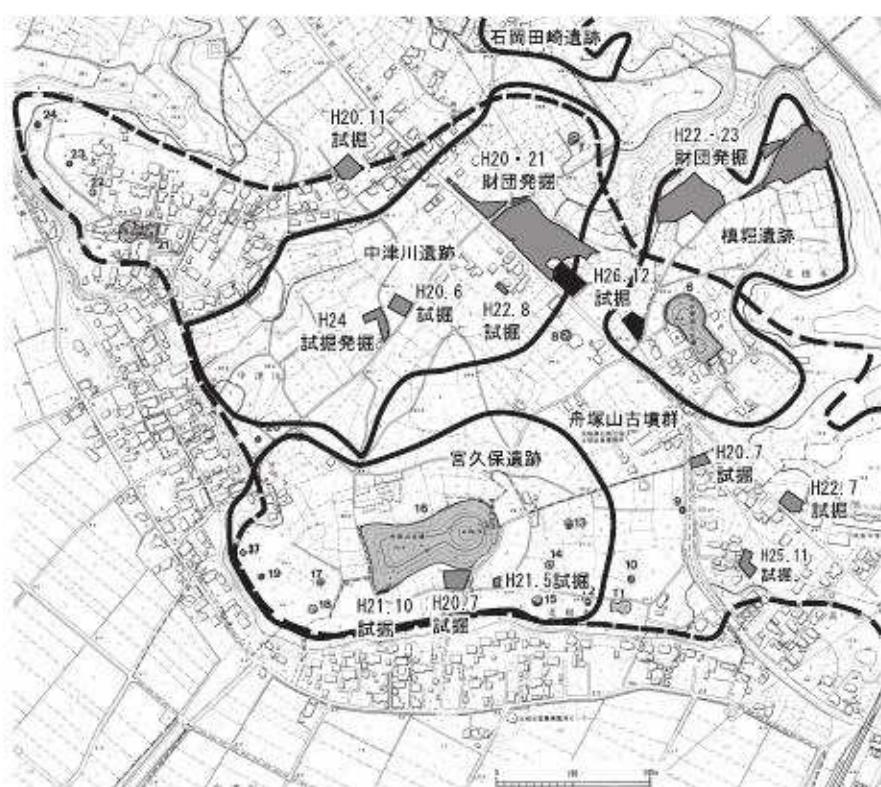


図36 横堀遺跡・中津川遺跡 調査地点位置図 (S=1/10,000)

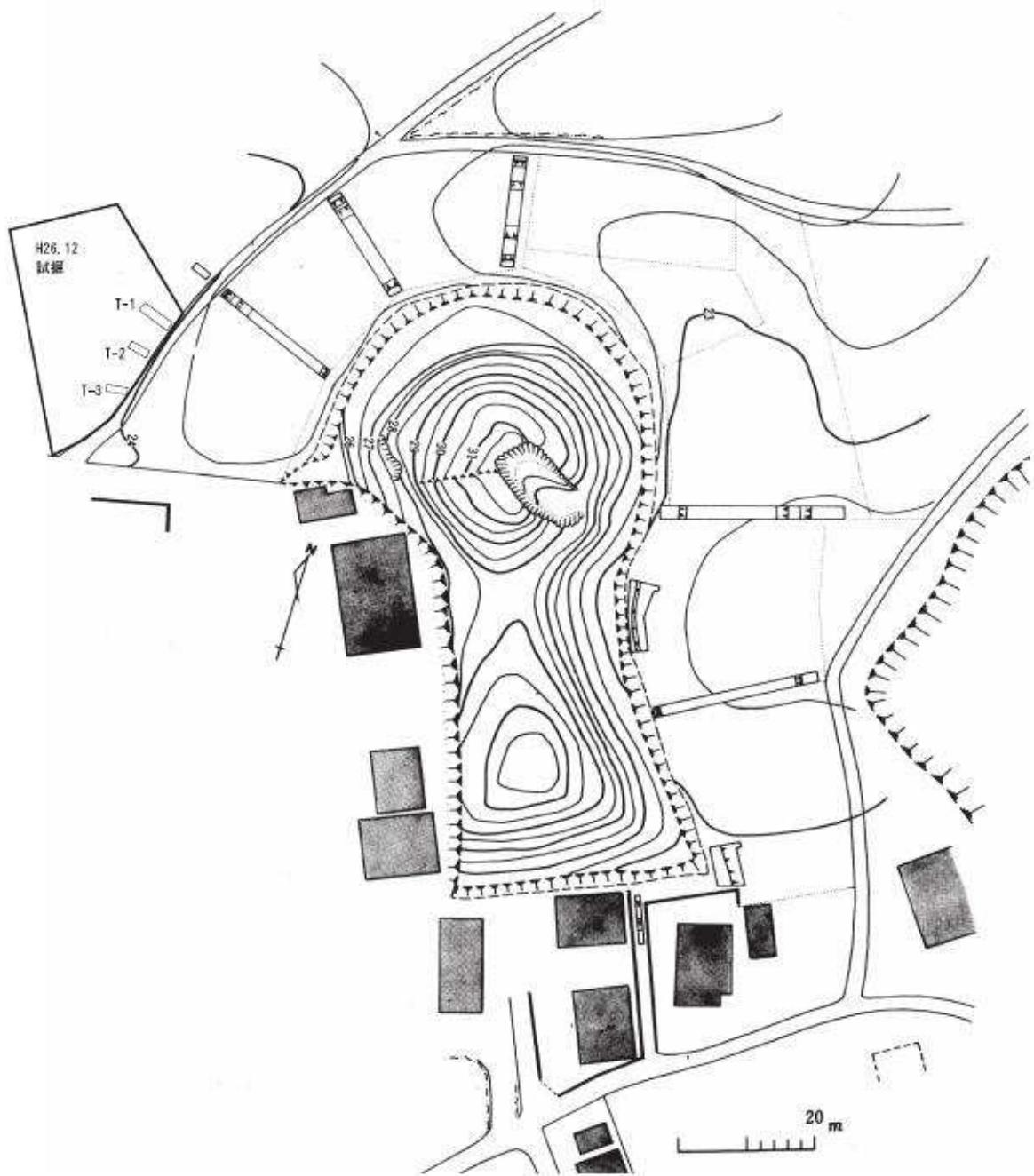


図 37 横堀遺跡・府中愛宕山古墳 全体図 (S=1/1,000)

確認されなかった。ローム面までの深さは 0.26 ~ 0.35m 程度。

<引用文献>

諸星政得、松本裕治 1980 「府中愛宕山古墳周辺発掘調査報告」石岡市教育委員会

20 中津川遺跡

- ①所在地 石岡市中津川 124 番 1
- ②開発面積 1,016m²
- ③調査日 平成 26 年 12 月 17 日
- ④調査原因 太陽光発電事業
- ⑤調査担当者 谷仲俊雄
- ⑥調査概要 開発地は、平成 20・21 年に国道 6 号



写真 20 T-1・2 (南西から)

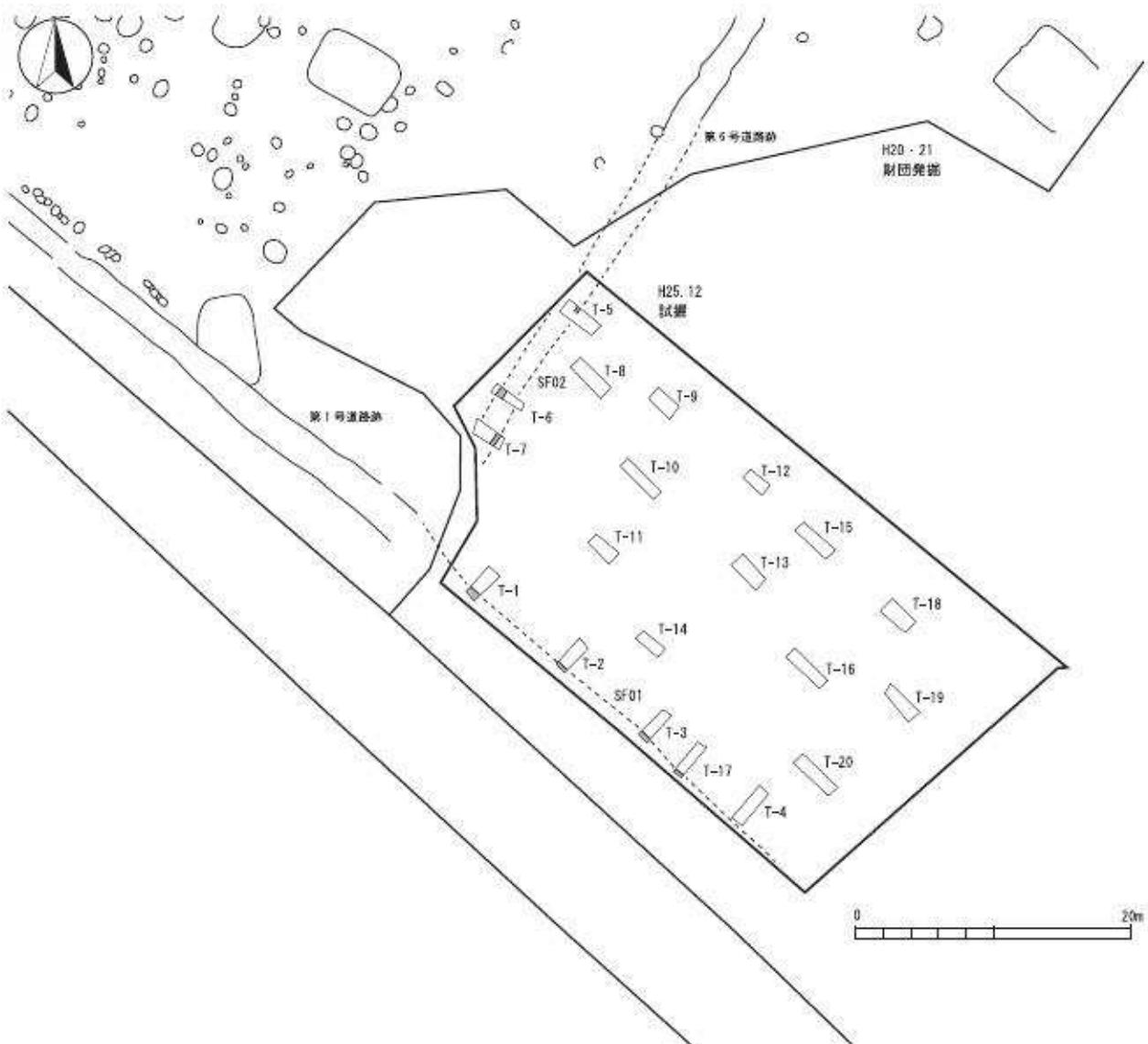


図 38 中津川遺跡 全体図 (S=1/500)



(左) 写真 21 中津川遺跡 SF01 (南から)

(上) 写真 22 中津川遺跡 調査風景

バイパス建設に伴い発掘調査が実施された地点（櫻井・近江屋・大久保 2011）の南側にある。開発区域内に 20ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、道路跡 2 条 (SF01・02) を確認した。遺構確認面までの深さは 0.15～0.2m。遺物の出土はなかった。

SF01 開発区域の西端で確認した。南東から北西方向に直線的に延びており、北側は国道 6 号バイパス建設に伴う発掘調査区に続いている。同調査の第 1 号道路跡と考えられる。覆土は黒褐色で、上面は一部硬化している。

SF02 開発区域の北側で確認した。南南西から北北東方向に直線的に延びており、国道 6 号バイパス建設に伴う発掘調査区に続いている。同調査の第 6 号道路跡と考えられる。覆土は暗褐色で上面は硬化しているが、遺存状態は悪い。

<引用文献> 櫻井完介・近江屋成陽・大久保隆史 2011『中津川遺跡』茨城県教育財團文化財調査報告第 338 集

21 国分遺跡

- ①所在地 石岡市府中 4 丁目 8165 番、8171 番 ②開発面積 1,495 m² ③調査日 平成 27 年 1 月 23～26 日
- ④調査原因 共同住宅建設 ⑤調査担当者 谷伸俊雄 ⑥調査概要 開発区域内に 7ヶ所の試掘トレンチを重機にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、堅穴建物跡 6 棟 (SI01～06) および土坑を確認した。遺構確

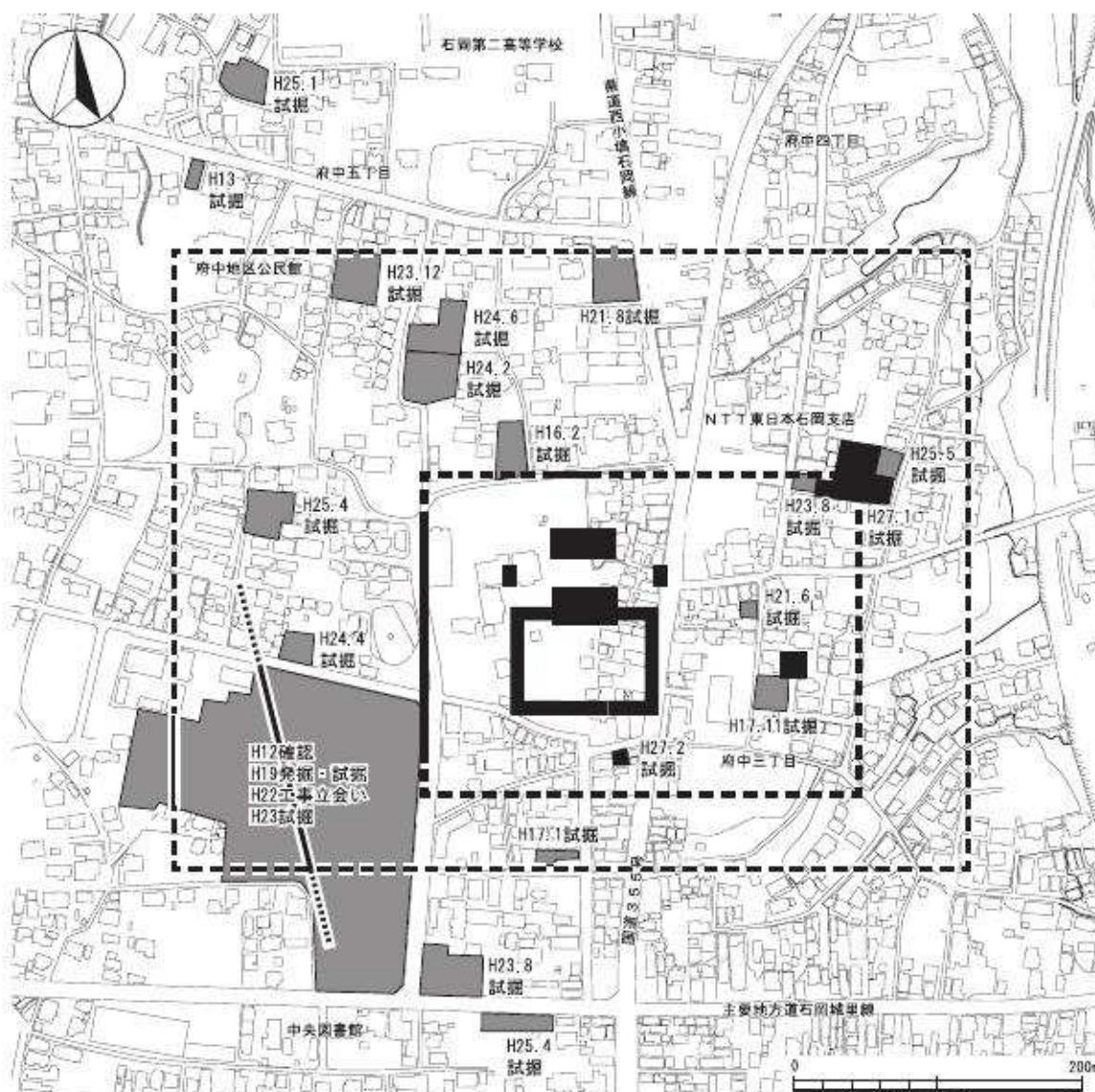


図 39 常陸国分寺跡・国分遺跡 調査地点位置図 (S=1/5,000)

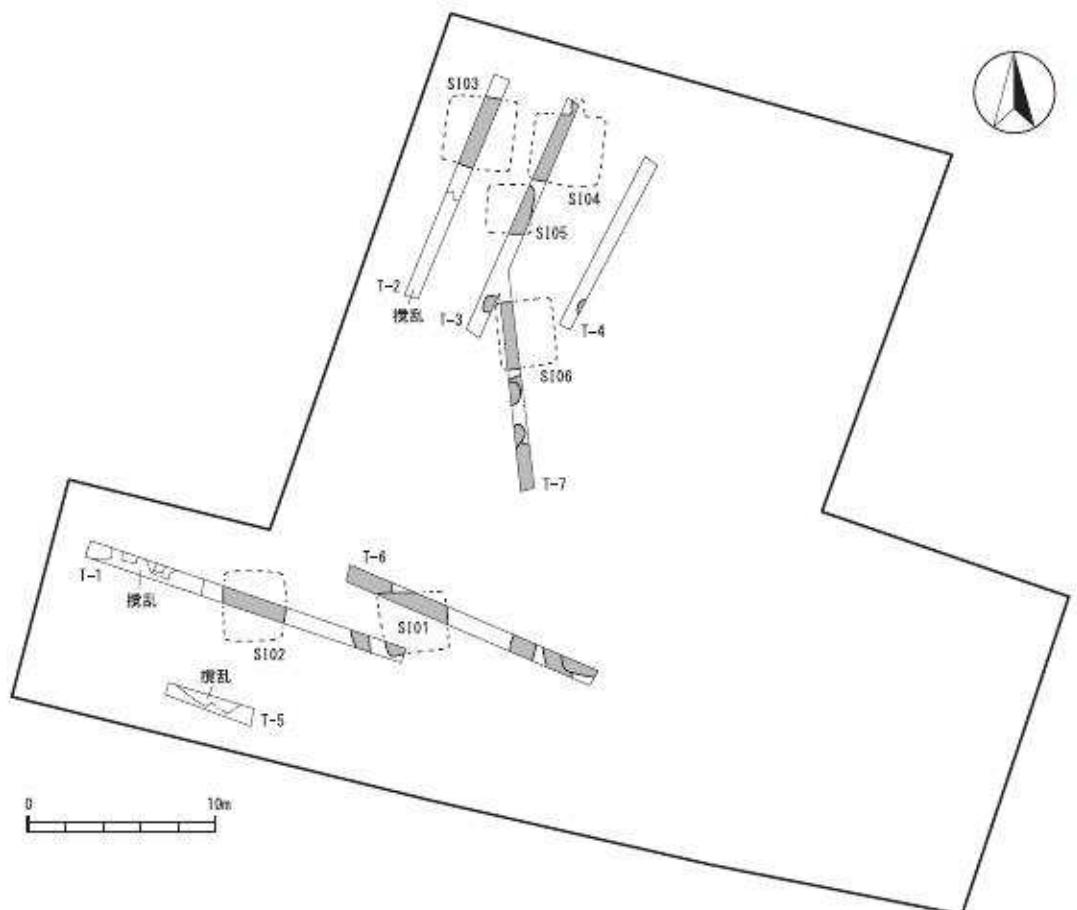


図 40 国分遺跡 全体図 (S=1/400)



写真 23 T-1 (東から)



写真 24 T-1 SI01 (北東から)



写真 25 T-1 SI02 (北東から)



写真 26 T-2 (北から)



写真 27 T-2 SI03 (北西から)



写真 28 T-3 (北から)



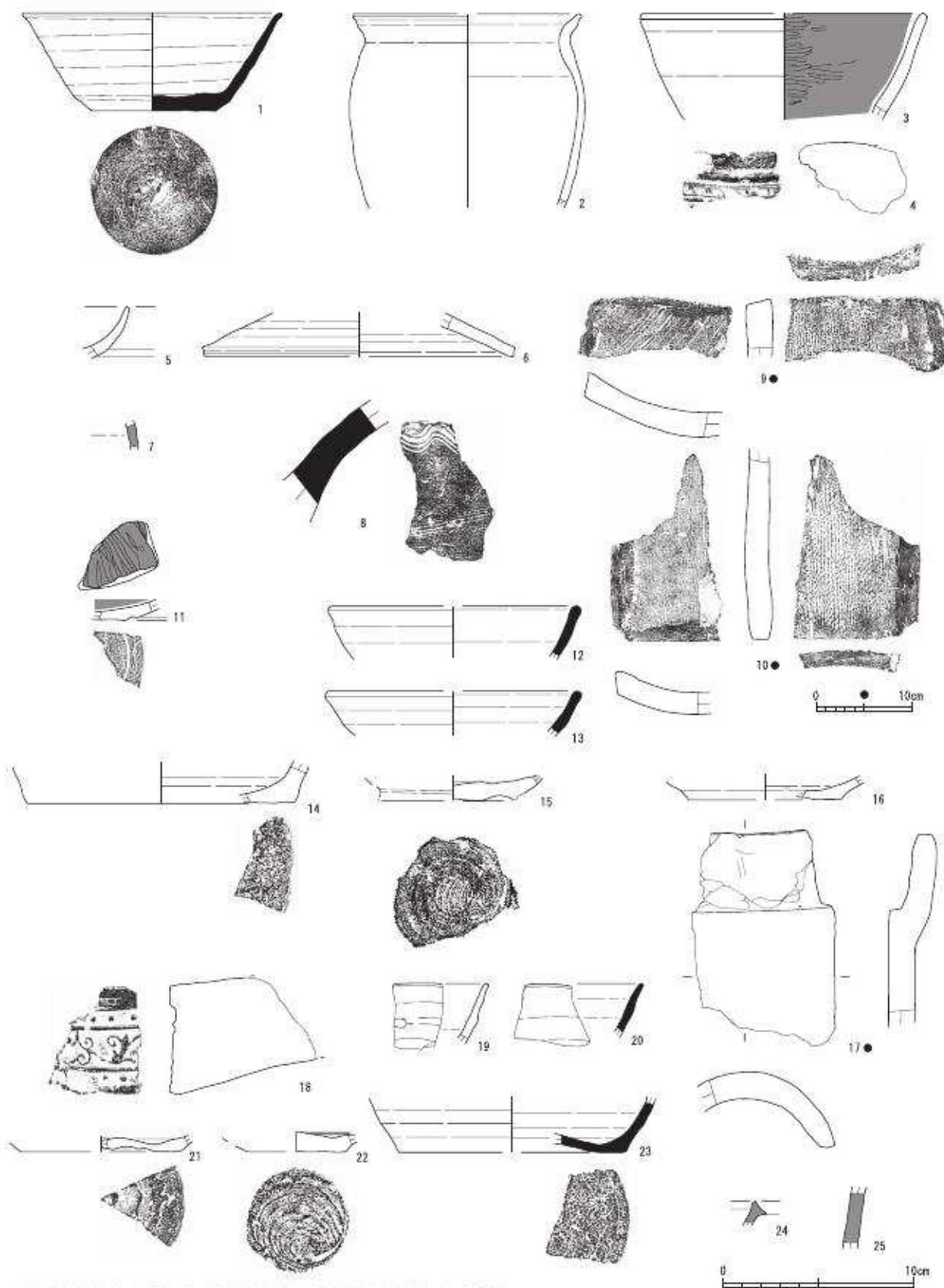
写真 29 T-6 (西から)



写真 30 T-6 SI01 (東から)

認面までの深さは 0.2 ~ 0.35m 程度。SI01 および SI02 の掘り下げを行ったところ、床面が確認されたことから豊穴建物跡と判断した。ともに南北主軸で、辺 3m 程度の方形であることから、同様の遺構 (SI03 ~ 06) も豊穴建物跡と判断している。表土および遺構確認面から奈良・平安時代の土器・瓦が出土しているほか、SI01 からは 9 世紀前半の須恵器杯 (図 41-1) や土師器甕 (図 41-2) が出土している。

⑦遺物 1 は須恵器の杯。口径 136mm、器高 61mm、底径 66mm。灰褐色。白色粒・黒色粒・砂粒少量、骨針微量含む。焼成良好。90% 残存。2 は土師器の甕。口径 120mm (復元)。暗褐~暗赤褐色。白雲母、白色粒少量、黒雲母微量含む。25% 残存。1・2 は T-1・SI01 出土。3 は土師器の椀。口径 158mm (復元)。外面黒褐~黒色、内面黑色。黑色処理。白色粒・白雲母・砂粒少量含む。15% 残存。4 は軒平瓦。灰~灰褐色。白色粒・砂粒・白



1・2 : T-1 S101, 3・4 : T-1, 5~10 : T-2, 11~13 : T-3, 12~17 : T-4, 18 : T-6, 19~25 : T-7

図 41 国分遺跡 出土遺物 (S=1/3・1/6)

雲母少量含む。3・4はT-1出土。5は土師器の杯。橙褐色。白色粒・白雲母少量、赤色粒微量含む。6は土師器の蓋。にぶい褐～橙褐色。白雲母少量、赤色粒・黑色粒・白色粒微量含む。7は灰釉陶器。オリーブ灰色。黑色粒含む。8は須恵器の甕。灰～青灰色。黑色粒、白色粒・砂粒少量含む。9・10は平瓦。9は灰～灰褐色。白色粒・白雲母・黑色粒・砂粒少量含む。10は灰褐色。白色粒・白雲母・黑色粒・砂粒少量含む。5～10はT-2出土。11は土師器の椀。外面にぶい褐～暗褐色。内面黒色。黒色処理。白雲母・白色粒微量含む。T-3サブトレ出土。12・13は須恵器の杯。ともに口径130mm(復元)で、胎土・焼成も近似していることから、同一個体の可能性がある。灰褐～褐色。白色粒、白雲母・半透明粒少量含む。焼成やや不良。ともに20%残存。14は土師質土器の鍋類。暗褐～黒褐色。白雲母多量、白色粒・半透明粒少量含む。外面煤付着。15は高台杯。外面淡褐～暗褐色。内面黒褐色。黒色処理。白雲母、白色粒少量、骨針微量含む。16は土師器の杯。暗褐色。白雲母、白色粒・砂粒・半透明粒少量含む。17は玉縁付丸瓦。橙褐～灰褐色。白雲母・白色粒・砂粒少量含む。12～17はT-4出土。18は軒平瓦。灰色。白色粒・黑色粒・半透明粒・砂粒少量含む。T-6出土。19は土師器の杯。橙褐色。黒雲母多量、赤色粒少量、黑色粒微量含む。20は須恵器の杯。白雲母多量、白色粒、黑色粒微量含む。21は土師器の杯。底径84mm(復元)。橙褐色。黒雲母多量、赤色粒・黑色粒微量含む。22は土師器の杯。底径52mm。明褐色。白雲母・白色粒・半透明粒少量、赤色粒・黑色粒微量含む。23は須恵器の杯。底径120mm(復元)。灰～灰褐色。白雲母・白色粒多量、黑色粒・砂粒含む。24・25は灰釉陶器。24は黒色粒少量、白色粒微量含む。胎土精良。25は黒色粒、白色粒少量含む。19～25はT-7出土。

22 鹿の子遺跡（第55次）

①所在地 石岡市鹿の子1丁目9541番1の一部



図42 出土遺物 (S=1/3)



写真31 調査風景

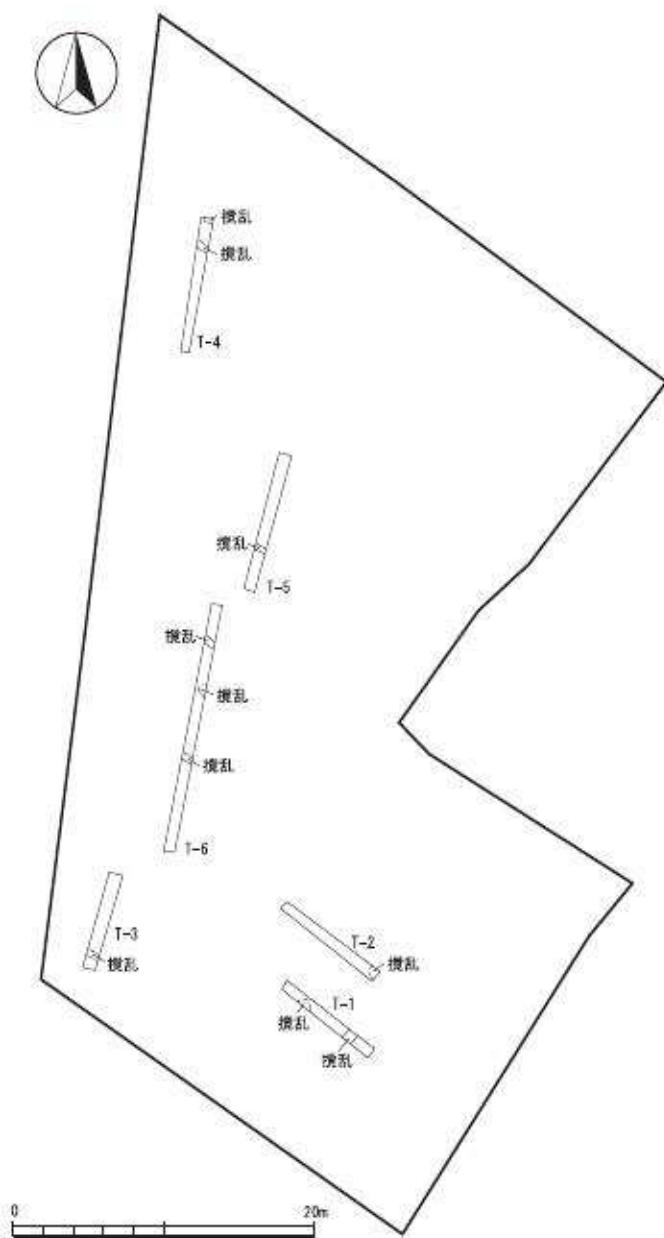


図43 鹿の子遺跡（第55次）全体図 (S=1/500)

②開発面積 1.917m² ③調査日 平成 27 年 1 月 27 日 ④調査原因 店舗建設 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発区域内に 6ヶ所の試掘トレンチを重機にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、遺構・遺物は確認されなかった。ローム面までの深さは、西側では 0.3 ~ 0.5m、東側では 0.55 ~ 0.65m 程度。⑦遺物 1 は土師質土器の皿。橙褐色。白色粒少量、砂粒・白雲母・黒雲母・赤色粒微量含む。焼成良好。35% 残存。T-2 出土。

23 宿畠遺跡（第 2 地点）

①所在地 石岡市下林字藤ノ宮 496 番 5 ②開発面積 492m² ③調査日 平成 27 年 2 月 2 日 ④調査原因 個人住宅建設 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発地は県道 7 号線道路改良工事に伴い発掘調査が実施され、縄文時代の陥し穴や、古墳時代～奈良・平安時代の竪穴建物跡や掘立柱建物跡が検出された地点（第 1 地点、松本 2008）の北側隣接地にあたる（図 46・47）。開発区域内に 12ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、古墳時代～奈良・平安時代の土器が出土したが、遺構は確認されなかった。ローム面までの深さは、中央では 0.2 ~ 0.3m、北側・南側では 0.5 ~ 0.6m 程度。⑦遺物 1 は土師器の杯。外面暗褐～黒褐色、内面暗褐色。白色粒少量、白雲母・骨針・黄褐色粒微量含む。T-9 出土。
<引用文献>松本直人 2008 「宿畠遺跡」茨城県教育財团文化財 調査報告第 300 集

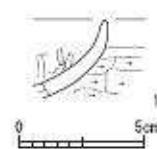


図 44 宿畠遺跡（第 2 地点）
出土遺物 (S=1/3)

24 尼寺ヶ原遺跡

①所在地 石岡市若松 3 丁目 8945 番 2 ②開発面積 330m² ③調査日 平成 27 年 2 月 4 日 ④調査原因 個人住宅建設 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発区域内に 5ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、開発区域の西側において埋没谷を確認したが、遺構・遺物は確認されなかった。ローム面までの深さは 0.5 ~ 0.8m 程度。

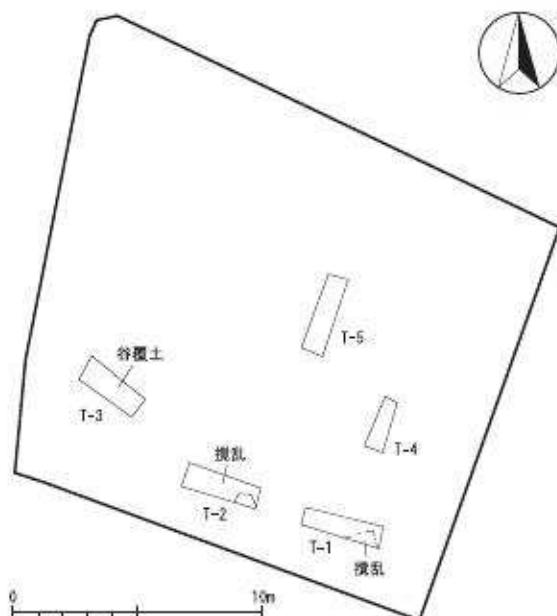


図 45 尼寺ヶ原遺跡 全体図 (S=1/300)

25 木間塚遺跡（第 18 地点）

①所在地 石岡市杉並 4 丁目 12220 番 39 ②開発面積 3m² ③調査日 平成 27 年 2 月 13 日 ④調査原因 通信用アンテナ基地局設置 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 開発区域内に 1ヶ所の試掘トレンチを人力にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、遺構・遺物は確認されなかった。また、ローム層の掘り下げを表土下 1m まで行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。



写真 32 尼寺ヶ原遺跡 調査風景

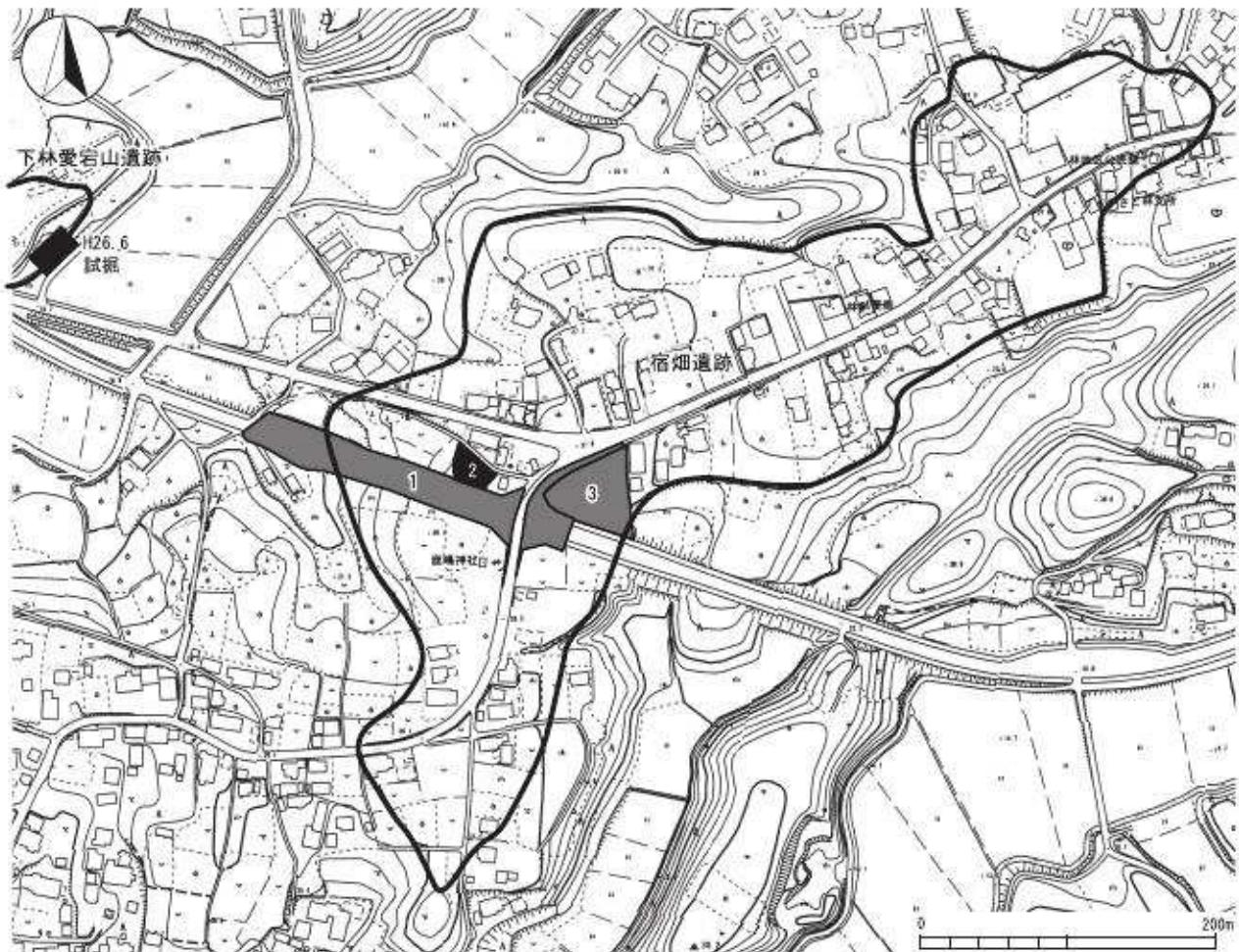


図 46 宿畠遺跡 調査地点位置図 (S=1/5,000)

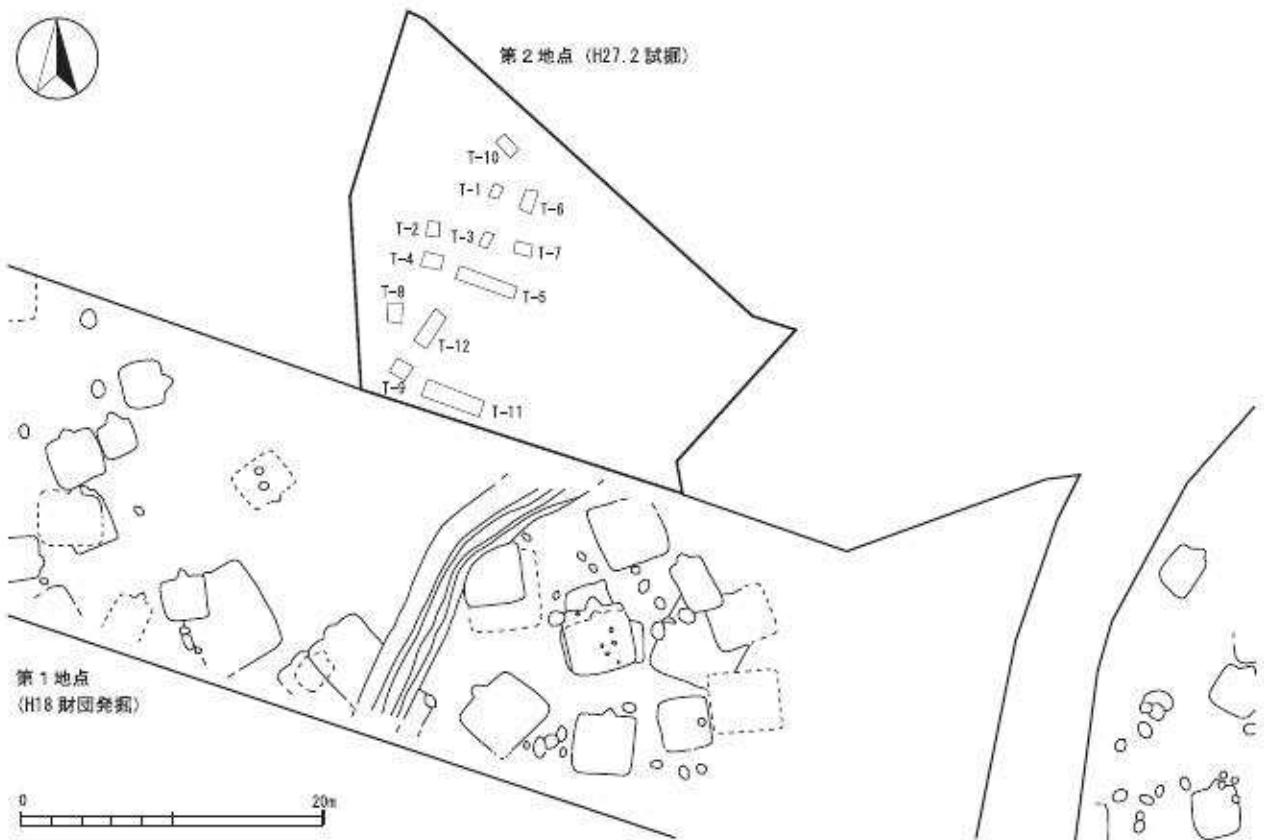


図 47 宿畠遺跡（第2地点）全体図 (S=1/500)

26 常陸国分寺跡

①所在地 石岡市府中3丁目953番

②開発面積 103m²

③調査日 平成27年2月23日

④調査原因 個人住宅建設

⑤調査担当者 谷仲俊雄

⑥調査概要 開発

区域内に2ヶ所の試掘トレンチを重機にて設定し、遺跡の有無を確認した。その結果、T-2の北側において遺構を確認したことから、トレンチを拡張し、遺構の規模・形状を確認することとした（T-2拡張区）。確認した遺構は、竪穴建物跡1棟（SI01）および溝1条（SD01）で、遺構確認面までの深さは0.74～0.88m。

SI01 T-2北側およびT-2拡張区において確認した。北側は搅乱によって破壊されており、東側は試掘トレンチ外となる。南北長2.5m以上の方形で、西壁にカマドが付設されている。床面および壁際溝を確認した。奈良時代、8世紀中葉頃の土師器・須恵器（図49-9～27）が出土している。

SD01 T-2拡張区において確認した。北側は搅乱によって破壊されており、南側は試掘トレンチ外となる。幅1.4mで、奈良・平安時代の土器が出土している。試掘トレンチ内ではSI01と重複していないが、SI01が南北軸なのに對し、SD01は東偏していることから、北側の搅乱もしくは試掘トレンチの北側では重複すると考えられる。出土遺物（図49-28）から推測すると、SI01より後出する可能性が高い。

⑦遺物 1～8はT-2およびT-2拡張区から出土した土器である。1は土師器の杯。口径160mm（復元）。橙褐色～赤褐色。白色粒・黒色粒・赤色粒少量、白雲母・角閃石微量含む。内外面ミガキ調整。焼成良好。10%残存。2は土師器の甕。橙褐色。砂粒、白雲母・白色粒・黒色粒少量、黑雲母微量含む。3は須恵器の杯。外面青灰～

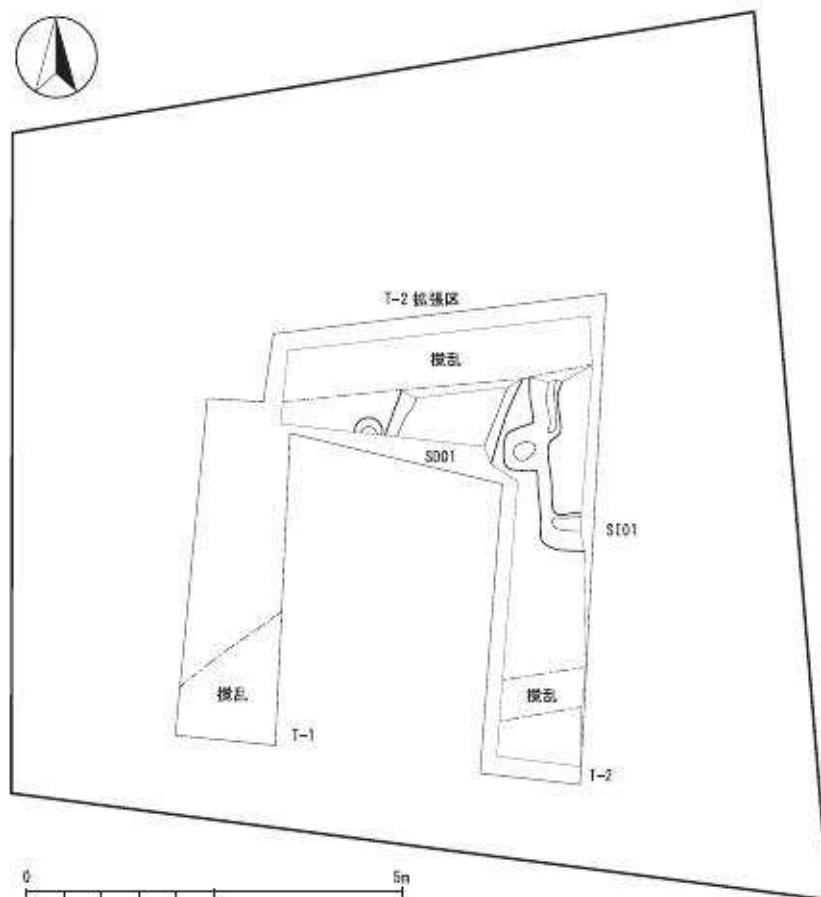
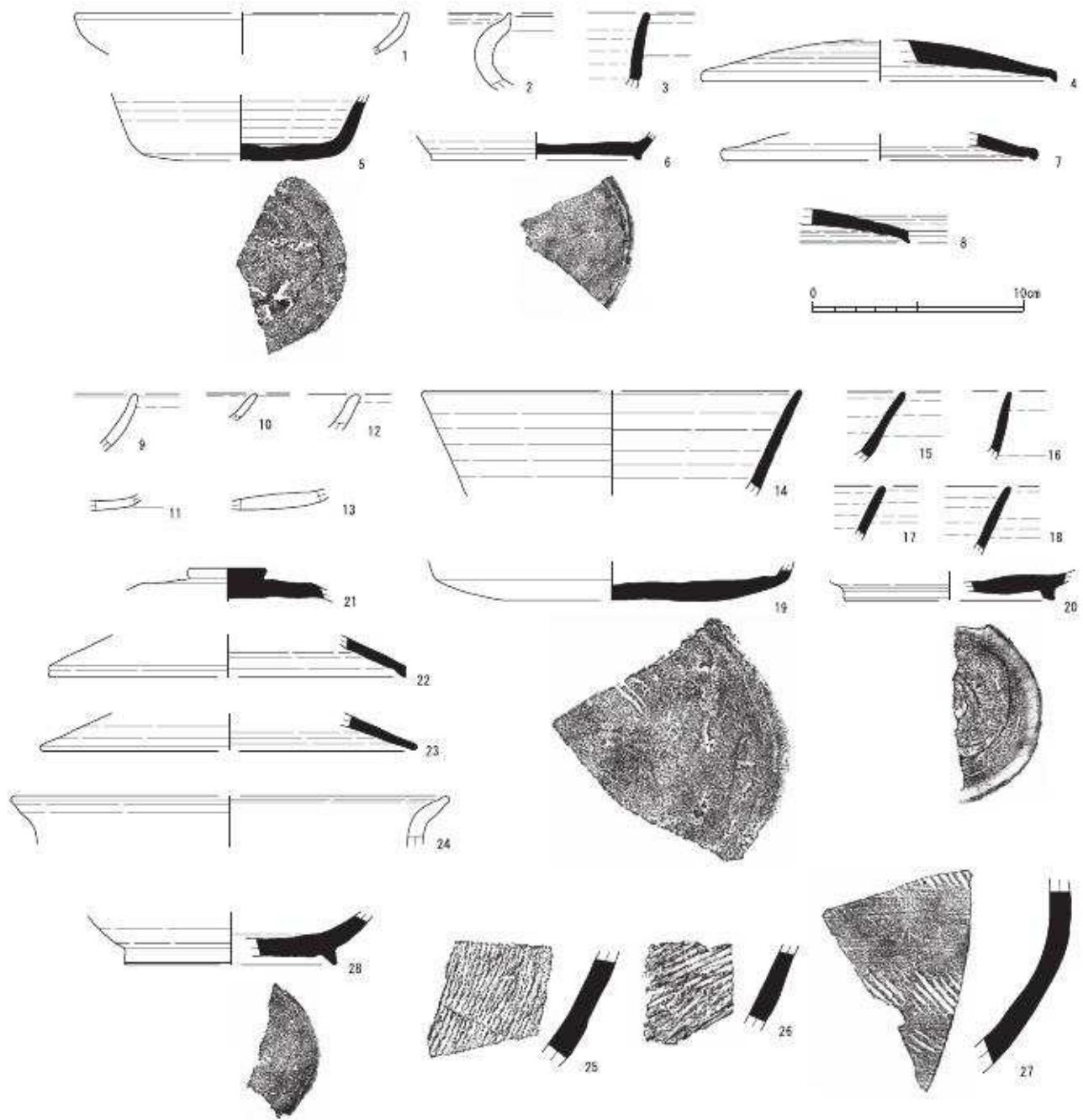


図48 常陸国分寺跡 全体図 (S=1/100)



写真33 常陸国分寺跡 遺構確認状況（北から）



1-4・6: T-2、2・3・5・7-8: T-2抜掘区、9-27: SI01、28: SD01

図 49 常陸国分寺跡 出土遺物 (S=1/3)

灰色、内面灰～灰褐色。白色粒、砂粒・黒色粒少量含む。焼成良好。4は須恵器の蓋。口径170mm(復元)。外面青灰～オリーブ灰色、内面灰～青灰色。白色粒・黒色粒少量、砂粒・骨針微量含む。焼成良好。木葉下産。25%残存。5は須恵器の杯。灰～灰褐色。白色粒、白雲母・半透明粒少量含む。新治産か。20%残存。6は須恵器の高台杯。底径50mm(復元)。外面青灰～灰色、内面灰～灰褐色。白色粒・黒色粒少量、砂粒微量含む。焼成良好。木葉下産か。25%残存。7は須恵器の蓋。口径148mm(復元)。外面青灰色、内面青灰～灰色。白色粒少量、骨針微量含む。焼成良好。木葉下産。10%残存。8は須恵器の蓋。外面灰～青灰色、内面灰～青灰色。白色粒少量、骨針微量含む。焼成良好。木葉下産か。

9～27はSI01より出土した土器である。9～13は土師器の杯。9～11はともに赤褐色で、白雲母・白色粒・砂粒少量、黄褐色粒微量含む。11は骨針も微量含む。外面はケズリ後、ミガキ調整。内面はミガキ調整。焼成良好。色調・胎土・調整・焼成とともに類似している。12はにぶい褐～灰褐色。白雲母・白色粒少量、角閃石・

砂粒微量含む。13は外面淡褐色、内面淡褐～橙褐色。白雲母・白色粒・黄褐色粒微量含む。外面ケズリ調整、内面ミガキ調整。14～18は須恵器の杯。14は口径180mm(復元)。灰色。白色粒、白雲母・半透明粒微量含む。新治産か。15%残存。15は灰～暗灰褐色。白雲母多量、白色粒少量含む。新治産。16は灰～濃灰色。白色粒・骨針微量含む。焼成良好。木葉下産。17は灰褐～灰白色。白雲母、白色粒・半透明粒少量含む。新治産。18は灰褐～灰白色。白雲母、白色粒・半透明粒少量含む。新治産。19は須恵器の盤。灰～濃灰色。白色粒多量、半透明粒少量、白雲母微量含む。新治産。20は須恵器の高台杯。底径100mm(復元)。灰白～灰褐色。白色粒・砂粒少量、半透明粒・白雲母微量含む。40%残存。21は須恵器の蓋。灰褐色。白色粒、白雲母半透明粒少量含む。新治産。17・18・20と色調・胎土が類似している。22は須恵器の蓋。灰色。白色粒、白雲母・半透明粒微量含む。新治産か。14と色調・胎土が類似している。23は須恵器の蓋。灰～濃灰色。白色粒・骨針微量含む。焼成良好。木葉下産。16と色調・胎土・焼成が類似している。24は土師器の甕。暗褐～黒褐色。白雲母・白色粒・砂粒・半透明粒少量含む。25～27は須恵器の甕。25は褐～灰褐色。白雲母多量、白色粒・半透明粒・黄褐色粒少量、砂粒微量含む。新治産。26は灰色。白色粒・砂粒多量、白雲母少量含む。新治産。27は灰色。白雲母・白色粒微量含む。焼成良好。新治産か。

28はSD01より出土した須恵器の高台杯。底径100mm(復元)。白色粒・黑色紋、砂粒少量、骨針・赤色粒・白雲母微量含む。木葉下産。20%残存。



写真34 常陸国分寺跡 SI01・SD01(北から)



写真35 SI01(北から)

III 工事立会い

1 根古屋古墳群

①所在地 石岡市東大橋 643 ②工事面積 0.4m² ③立会日 平成 27 年 1 月 19

日 ④調査原因 電柱支線改修 ⑤調査担当者 谷仲俊雄 ⑥調査概要 根古屋古墳群は、園部川右岸の台地縁辺部から微高地上に所在する（遺跡番号 08-205-084）。電柱支線改修工事に伴い、東京電力株式会社より平成 26 年 7 月 29 日付で県教育委員会あて「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。工事計画地は根古屋 3 号墳の墳丘部分にあたり、8 月 8 日付で県教育委員会より、工事にあたっては市教育委員会が立会うように通知があった。これを受け、平成 27 年 1 月 19 日、工事立会いを実施した。立会いの結果、遺物は出土しなかった。

根古屋 3 号墳は径 20m、高さ 2m 程度の円墳で、園部川右岸の微高地上に位置する。支谷をはさんだ東 150m 程度の微

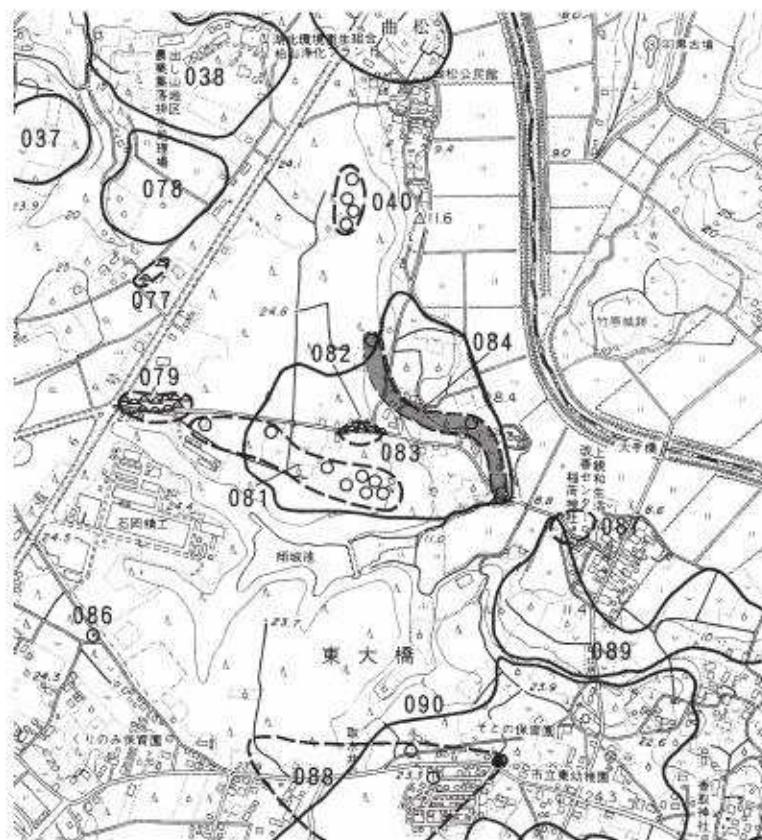


図 1 根古屋古墳群 位置図 (S=1/15,000)

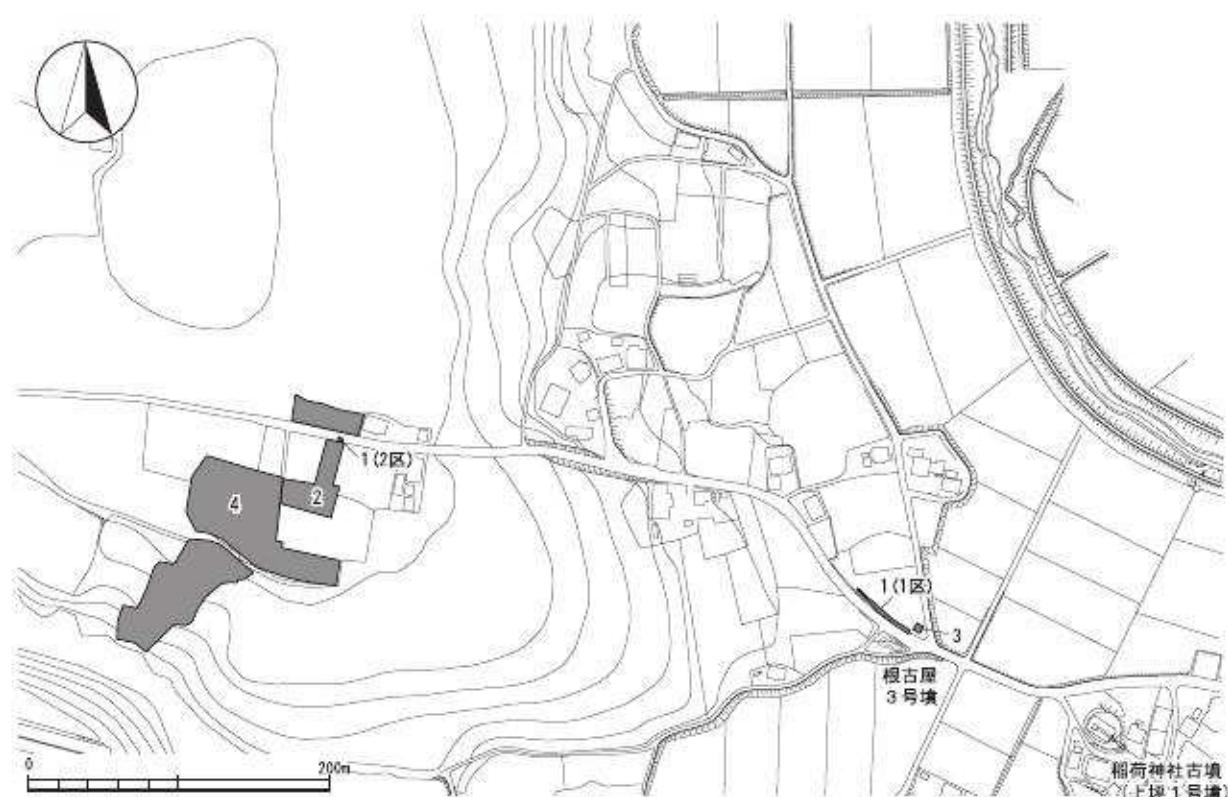


図 2 根古屋 3 号墳 位置図 (S=1/5,000)

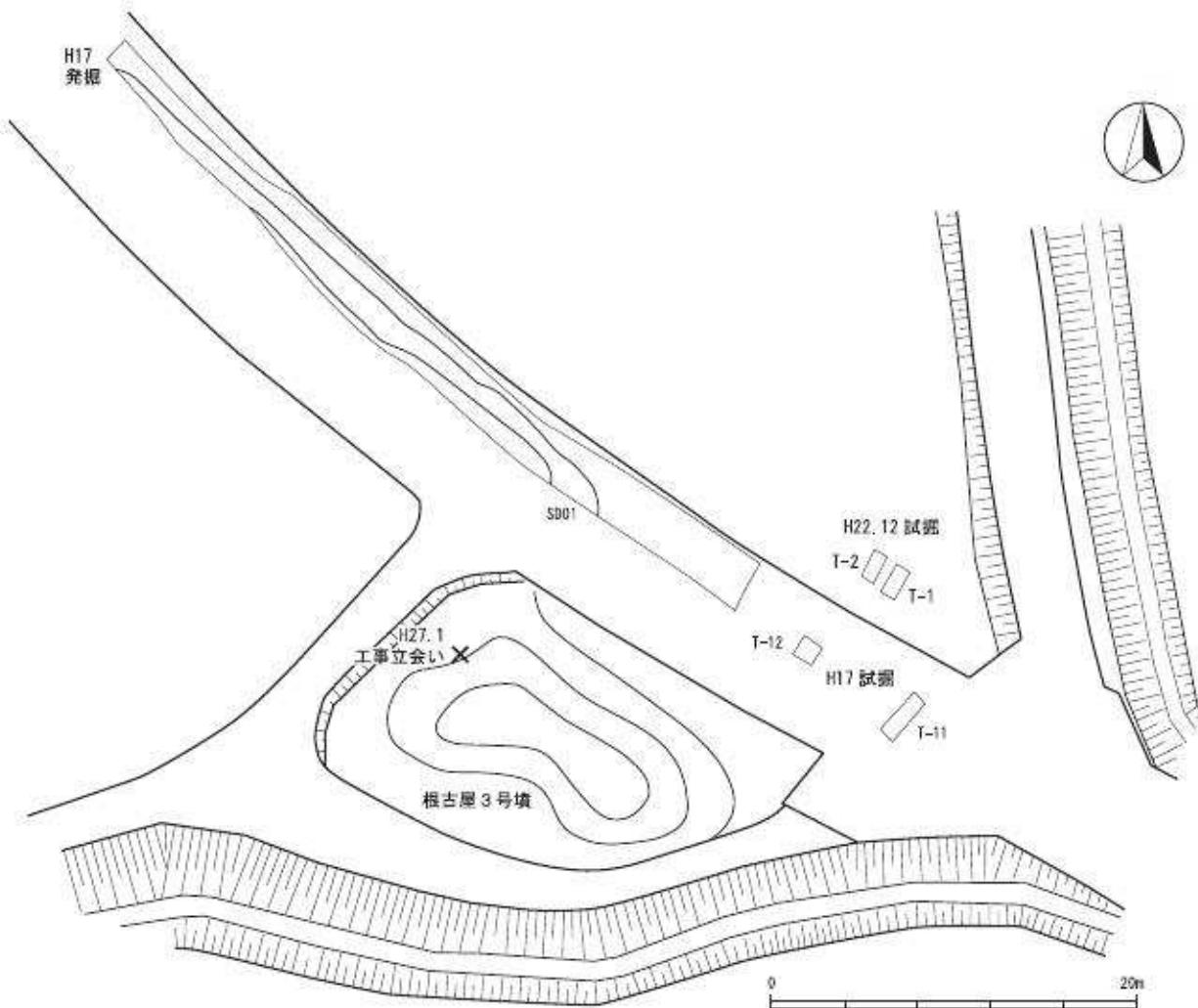


図3 根古屋3号墳 全体図 (S=1/400)

高地には、径44mの円墳、稻荷神社古墳（上坪1号墳）が存在している。稻荷神社古墳の時期は不詳だが、その立地から古墳時代中期後半～後期初頭の造営が想定されている（谷仲2015）。根古屋3号墳の時期を知る手がかりも現状ではないが、古墳時代後期になると小型古墳でも埴輪の樹立が認められる。今回の工事立会い地点は、根古屋3号墳の墳頂平坦面縁部から墳丘斜面かけてであり、埴輪の樹立やその崩落が想定される箇所にあたる。狭小な調査地点ではあるが、埴輪の出土が認められなかったことを積極的に評価すれば、小型古墳に埴輪が樹立される前、もしくは埴輪の終焉後の造営が考えられる。さらに微高地という立地をふまえると、古墳時代中期後半～後期初頭という年代を想定しておきたい。

<引用文献>

谷仲俊雄 2015「茨城県霞ヶ浦北岸の古墳編年」「シンポジウム 地域編年から考える一部分から全体へー」東北・関東前方後円墳研究会第20回大会

IV 小幡窯跡の概要と採集遺物

1 はじめに

古代常陸国南部の須恵器焼成を行った窯跡としては、木葉下窯跡群、大淵窯跡群、新治窯跡群があり、その他小規模な窯跡がいくつか知られていた。今回報告される小幡窯跡は、従前知られていないものである。

佐々木義則氏は石岡市八郷地区で発見される須恵器について、既知の窯で焼成されたものと異なる特徴を有しているものがあることから、八郷地区に未知の窯跡がある可能性を考えていた。そのことを聞いていた矢野は、野村真一氏にその情報を伝えていた。野村氏は環境保全活動を行うNPOに参画している傍ら、通年滞在している八郷地区の各地を訪問している。2012年5月、石岡市小幡の十三塚地区にイベントの準備のために訪れていた野村氏は、敷地に多量に散布している須恵器片に気がつき、矢野に連絡をした。後日現地で野村氏と矢野は、多器種の須恵器片と瓦片を多数確認し、また強く焼けた窯体片などをも確認した。佐々木氏に連絡をとったところ

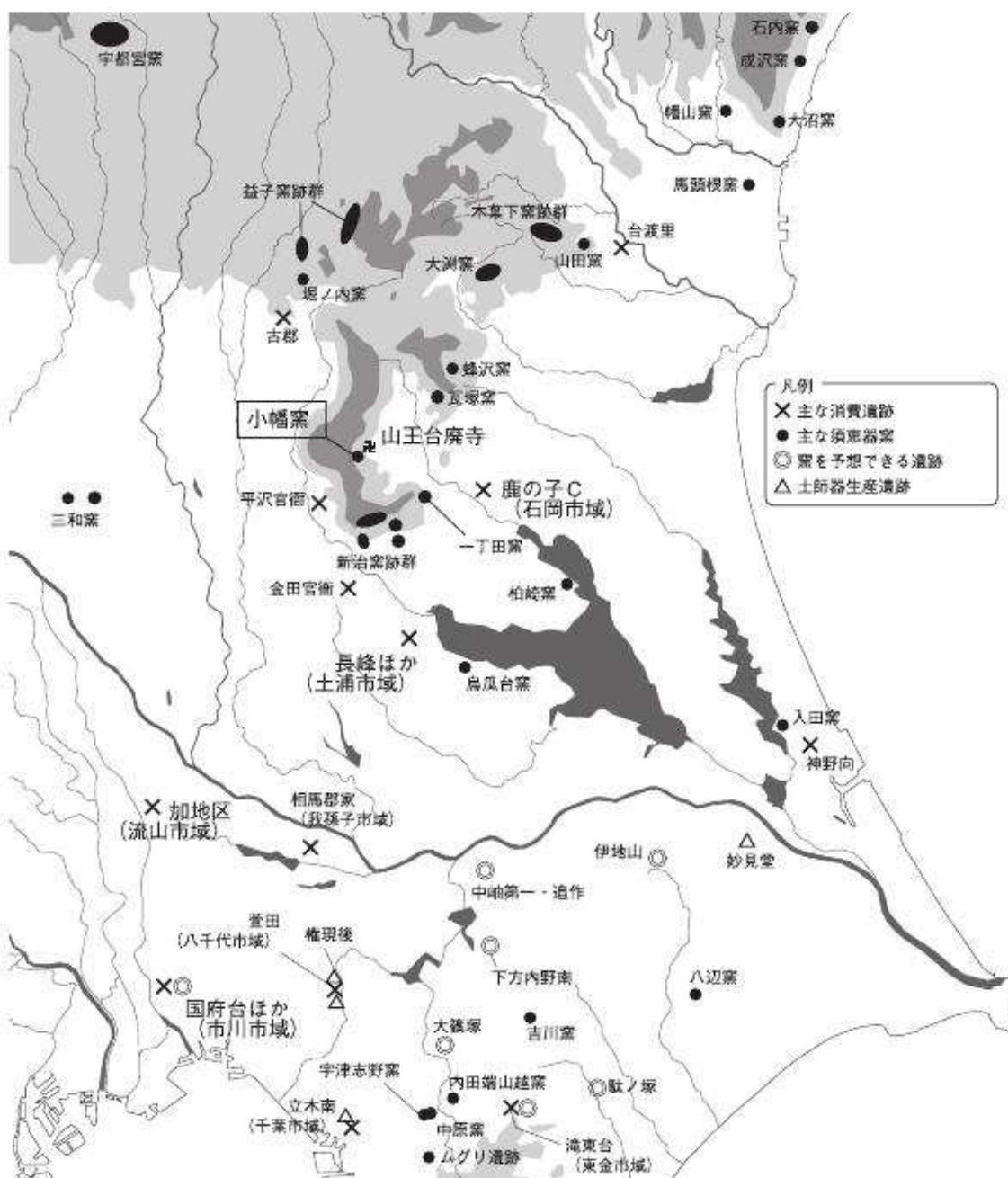


図 1 主な遺跡の位置

る、後日に埋蔵文化財関係者による確認が行われ、窯跡が1000年以上の眠りから覚めることとなる。

2 発見までの経緯

今回発見された小幡窯跡は、石岡市の西部の大字小幡の十三塚地区にあり、八郷盆地の西縁に当たるところで、緩斜面に集落や耕地が発達している。古くより筑波山の国府側の登り口として栄え、特に江戸時代に筑波山中禅寺が興隆を極めると、府中（現在の石岡）からの酒などの物資の輸送路や参詣客の道として、宿場として栄えていた。大正期に筑波山の南面に筑波鉄道が開通すると宿場は衰退する。現在は、みかん、柿、りんご、ぶどうといった多種の果樹が栽培される局所的な気候条件を活かして、果樹観光の中心地となっている。

窯跡は十三塚の集落の南東側で小河川を挟んだ低い尾根の南斜面にある。窯跡付近では、特に窯跡の存在を感じさせるような小字名もなく、伝承もないようである。現地は山側の湾入部から水が湧いているような土地で水田があったが、20～30年ほど前に尾根側を切り崩して埋め立てて梅畠を造成したという。尾根上には市道が通っているため尾根ぎりぎりまでは削ることはなかった。地元の方の話によれば、梅畠にカワラケ（土器片）が散布していることには気がついていたという。2009年に現所有者がこの場所に展示施設を兼ねた建物を建設することになり、整地が行われた。このときも尾根側は整形程度で大きく削ることはなく、埋め立てた土砂を更に南東の川側の水田に押して平場が広くなるように造成した。また、山側から水が湧いてくるので山側に排水溝を掘った。このときにも灰色のカワラケが多量に出ていたが、土地所有者は陶器が大量に投棄されている程度に思っ

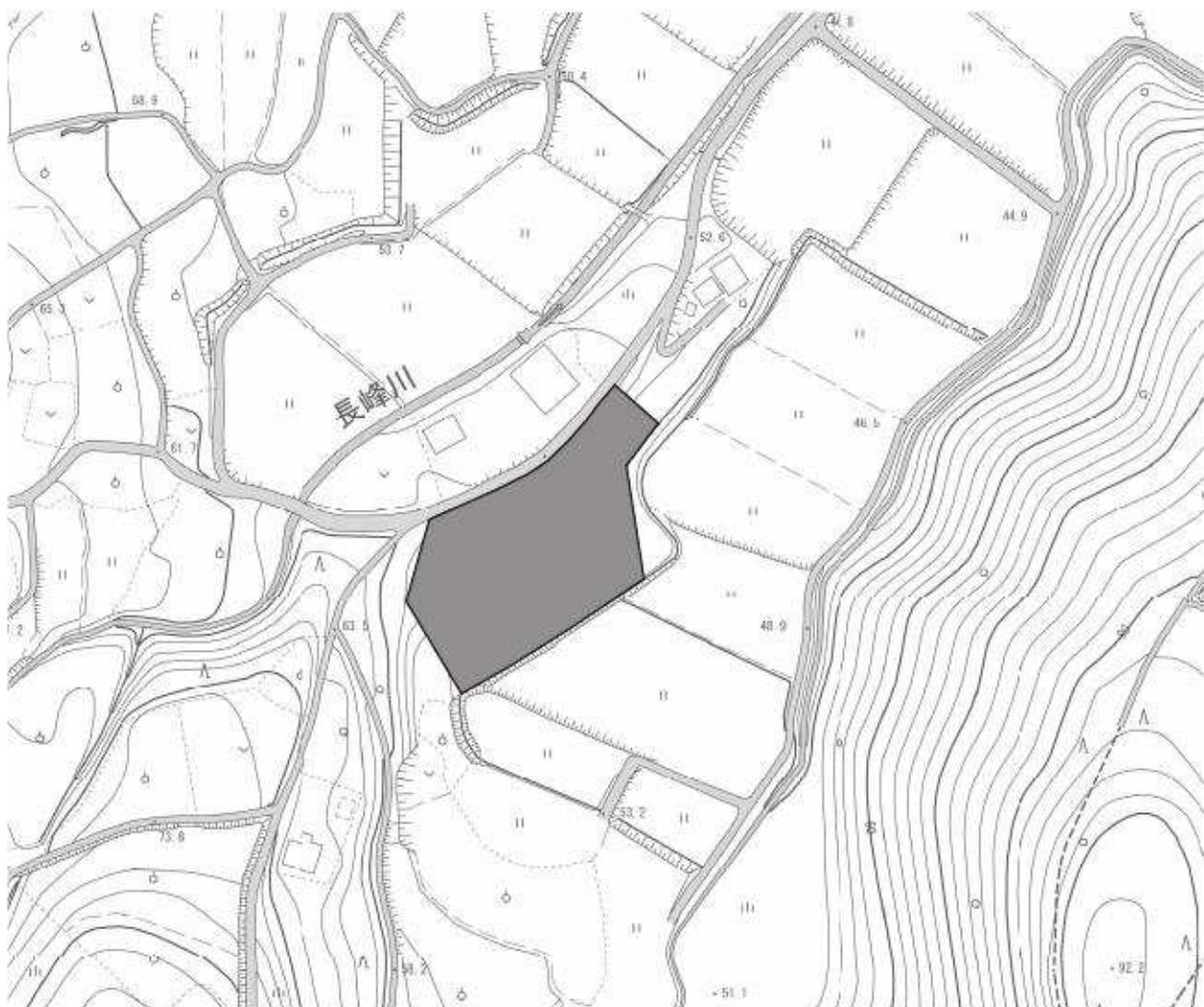


図2 遺跡の位置

ていたという。土地所有者は建物竣工後に庭に菜園を作っていたが、掘るたびに土器片や瓦片が出てくるので困って傍らに積んで置いた程であった。

ひょっとすると八郷盆地に新しい須恵窯が見つかるかも知れない、こんな話を聞いていた野村氏はイベントの準備のため現地を訪れた際、すぐさま敷地に散布する多量の須恵器片に気がついた。2012年5月の事である。

3 発見後の経緯

2012年6月24日 発見者の野村氏と矢野が現地訪問

2013年3月31日 埋蔵文化財関係者が訪問し窯跡を確認する

2013年4月12日 再び野村氏と矢野が、新たに窯跡と灰原を確認する

2012年6月、発見者の野村氏と共に現地を訪れた。すでに集めておいてあった土器片には杯、蓋、瓶、丸瓦、平瓦など多様なものがあった。敷地内ではすぐに数十点の破片が採取され、造成時の削り残りの部分では、須恵器片と共に炭化材片や灰色に強く焼けた粘土塊があり、粘土塊はスサのようなものが混ぜられているようで須恵器同様還元焼成されているので窯体片と推定して灰原の可能性があると判断、佐々木氏に連絡を取った。これから夏に向かい草木が茂る時期であるので、これ以上の破壊の恐れもないため、草が枯れている冬季に埋蔵文化財関係者が現地調査をする事とした。土地所有者も土器片が奈良時代～平安時代の古代のものであることを知って理解を示し、快く調査を許可してくれた。

2013年3月に、埋蔵文化財関係者による現地調査が行われた。ひたちなか市生活・文化・スポーツ振興公社佐々木氏、石岡市教育委員会小杉山大輔氏、茨城県教育財團・川井正一氏、白田正子氏、下妻市教育委員会赤井博之氏、矢野らが現地を調査した。現地の観察により弧状の赤変部や灰原の一部が確認され少なくとも1ヵ所以上の窯の存在が推定された。須恵器の型式から、8世紀後半（奈良時代末）～9世紀初め（平安時代初頭）の時期が推定され、同時に見いだされる瓦の推定型式からも矛盾はないという。須恵器は器種が多様（杯、盤、高盤、長頸壺、蓋、瓶など）で、整形に優れ、焼成が比較的良好、と技術的な高さが窺える。また、瓦（平瓦、丸瓦、軒丸瓦）が伴う点が注目される。

新治窯跡群との技術的な関係と、新治窯跡群と木葉下窯跡群の間にある窯跡としてその性格が注目されるところである。

4 確認された窯跡の概要

現地は小さな尾根の南東側斜面に当たる。深く掘削した部分では筑波變成岩類に属する雲母片岩の強風化部で、岩屑を含む褐色のローム層が覆っている。鍵層となるようなテフラは露出していない。風化岩盤が露出している部分では遺構の存在はわからないが、表層の堆積層が残存しているところに窯跡の遺構が遺存している。2013年3月の調査で窯の存在が示唆されたため、4月に精査したところ、新たに4ヵ所の窯跡と思われる赤変を伴う遺構と思われる物を確認した。一つは暗灰色の窯体そのものが露出している。また窯体と対応すると思われる灰原を3ヵ所確認した。また、窯体を確認できないが窯跡の上位に炭化材片や須恵器片を伴う灰原を3ヵ所見いただした。合計8基以上が存在する可能性がある。

5 確認された遺構の概要

窯体① 灰原(1)を伴う（窯体そのものは削剥された可能性大）

窯体② 灰原(2)を伴う（窯体そのものは削剥された可能性大）

窯体③ 灰原(3)を伴う（窯体そのものは削剥された可能性大）

窯体④ 灰原(4)を伴う（窯体そのものは削剥された可能性大）

窯体⑤ 強被熱を受けた窯体が残る

灰原(6) 窯3の西上方にあり須恵器片、炭片、窯体片を伴う

灰原(7) 窯4の東上方にあり須恵器片、炭片、窯体片を伴う

灰原(8) 窯5の西方にあり須恵器片、炭片、窯体片を伴う

なお、窯跡そのものは発掘調査による確認をしていないため、現時点での遺構形態の詳細は不明であるが、窯体が岩屑混じりのローム堆積層内に観察されることから、堆積物をくり抜いて形成した窯^{あながま}が予想される。発掘調査による窯の構造の解明や遺構範囲の確定が望まれる。

6 採集遺物

小幡窯跡の出土資料はひたちなか市埋蔵文化財調査センター企画展「常陸国の須恵器生産－最近の調査・研究から」で、2014年1月26日（日）から同年5月11日（日）の期間にはじめて一般公開された。企画展を見学した松本は、下総国府出土須恵器と類似していることに着目した。採集品はすべて石岡市教育委員会が保管していたことから、2015年2月10日に石岡市教育委員会で出土須恵器を実見した。さらに、同年3月19日に野村氏及び矢野の案内により現地を見学し、追加で表面採集を実施した。追加資料は野村氏の許可を得て借用し、市立市川考古博物館で基礎整理を実施した。

同年5月19日には石岡市教育委員会保管資料を市立市川考古博物館が借用し、追加の採集資料と合わせて調査・検討を行った。この項の記述はその成果がもとになっている。なお、資料の一部は博物館実習を兼ねた小企画展「窯の須恵器・国府の須恵器－常陸國小幡窯と下総国府－」で、2015年6月27日から2016年6月12日まで展示している。展示が終了次第、追加資料も含めて全て石岡市教育委員会にすみやかに返却する予定である。

(1) 須恵器

実測可能な個体は図3、表2に示し、表1で補足している。須恵器の年代觀は上述のとおり8世紀後半から9世紀初めころであるが、佐々木義則氏はさらに踏み込んで8世紀末（第4四半期）から9世紀初めとし、（仮称）

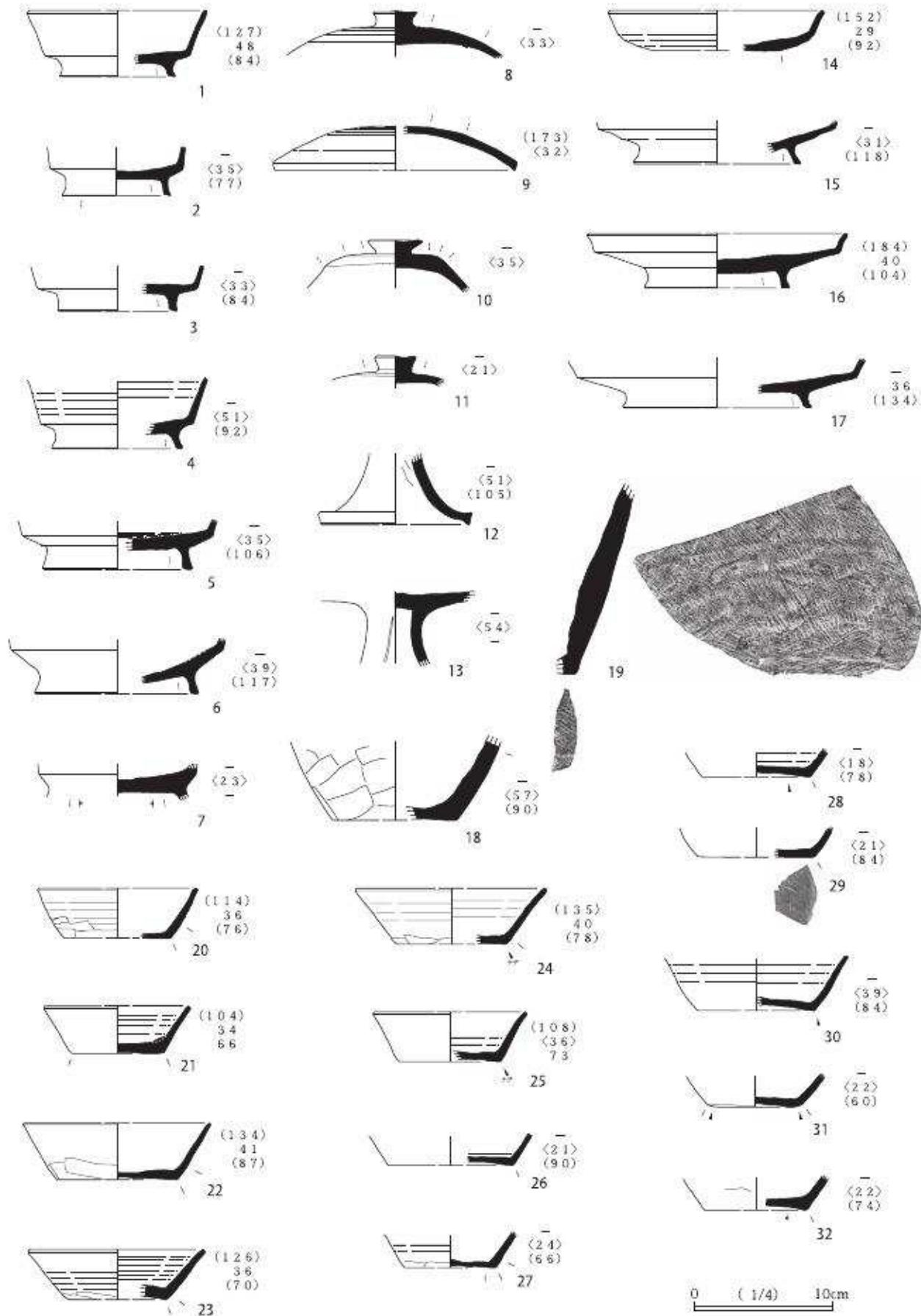
小幡窯（古）、（仮称）小幡窯（新）の2段階に細分している（佐々木2014）。佐々木氏によれば前者は堀ノ内窯跡群花見堂支群3号窯や新治窯跡群東城寺桑木窯と、後者は堀ノ内窯跡群花見堂支群2号窯や新治窯跡群小高村内窯と併行する年代である。採集品であるため出土遺構を特定できないという制約もあるが、窯体と一部の灰原に先後関係もあることから参考までに触れておく。

器形や整形技法は新治窯跡群の須恵器とよく似ており明確な違いはないが、ロクロ整形に布、皮、コテ等をつかって平滑に仕上げたり（図3-26、28）、見込みが鋭い無台杯（同24）がある。また、回転糸切りでロクロから切り離す個体が2点（7、32）ある。

窯詰めに関する所見では、無台杯の内面底部に融着痕が残る個体（同21）、口縁部にのみ焼きむらが残る個体（同22）、火襷痕が残る個体（同28）などがある。一般的には正位で直接重ねて焼いたと思わ

表1 小幡窯跡採集須恵器 器種別重量計測表 (g)

器種		製品のみ	窯体付着品	合計
小型品	杯類	不明他	1,092	1,092
		無台杯	1,803	371
		高台杯	1,429	1,429
盤・皿・蓋	蓋	1,573	160	1,733
	高盤	195		195
	高台盤	504		504
	無台盤	178		178
	無台 or 高台盤	73		73
他	杯類 or 盤類	126		126
	高台杯 or 高台盤	1,434	77	1,511
	蓋 or 無台盤		34	34
不明		35		35
小計		8,442	642	9,084
大型品	瓶類	長頸瓶	5	5
		他	29	29
	甕類	甕類	2,207	63
		甕	15	15
不明			49	49
瓦		小計	2,305	63
			3,080	
合計		13,827	705	14,532



△ 回転糸切り △ 静止糸切り △ へら切り △ へら切り後ナデ △ 回転へら前り △ 手持へら削り

図3 小幡窯跡出土須恵器

表2 小幡窯跡 採集須恵器観察表

図	番号	器種	含有物・色調・技法の特徴・焼成など	残存率
3	1	高台杯	白色粒(～中・少)、灰～暗灰	口縁部15%、体～底部35%、68g
	2	高台杯	白色粒(～中・少)、灰～暗灰、高台端部くぼむ	体部20%、底部50%、58g
	3	高台杯	白色粒(～中・少)、灰～暗灰	20%、32g
	4	高台杯	白雲母(極小・微)・白色粒(～大・少)、灰～暗灰	体部25%、底部40%、56g
	5	高台杯	白雲母(～中・少)・白色粒(～大)・半透明粒(～中・少)、灰白～灰	45%、130g
	6	高台杯	白雲母(極小・微)・白色粒(～小・少)、灰、内面の表面一部剥離	20%、58g
	7	高台杯	白色粒(～大)、灰～暗灰、底部回転糸切り痕	50%、121g
	8	蓋	白雲母(極小・微)・黒雲母(極小・微)・白色粒(～中)・半透明粒(～中)、灰	天井部25%、つまみ完形、109g
	9	杯蓋	白色粒(極小・少)・鉄分・灰～オリーブ灰、口縁部から天井部内面に自然釉	15%、47g
	10	杯蓋	白雲母(極小)・白色粒(～中)・半透明粒(～中)、灰	一部、142g
	11	杯蓋	白色粒(～中・多)・半透明粒(～小)、灰	一部、56g
	12	高盤	白色粒(大)、灰、外面自然釉付着、低脚盤の可能性あり	30%、57g
	13	高盤	白色粒(～中)、灰	底～脚部一部、177g
	14	無台盤	白色粒(～大)・半透明粒(～大)、灰～暗灰	口縁部15%、体～底部30%、76g
	15	高台盤	白雲母(極小・微)・白色粒(～大)・半透明粒(～大)、灰	体部35%、底部25%、79g
	16	高台盤	白色粒(～小)・半透明粒(～大)、灰	口縁部15%、体～底部45%
	17	高台盤	白雲母(～小・多)・白色粒(～中・多)・半透明粒(大・微)、灰	口縁部一部、体～底部30%、98g
	18	壺?	白色粒(～大・多)、青灰～暗青灰、底部未調整か	30%、158g
	19	甕	白雲母(～小・微)・白色粒(～大)。タタキ整形、當て具痕ナテ消し	一部、426g
	20	無台杯	白雲母(極小・多)・白色粒(～大・少)、灰、底部ヘラ切り	25%、38g
	21	無台杯	白色粒(～小)、灰、底部ヘラ切り	口縁～体部一部、底部100%、64g
	22	無台杯	白雲母(極小・微)・白色粒(～小・多、大・微)、明青灰～青灰、口縁部に焼きむら	口縁～体部15%、底部40%、61g
	23	無台杯	白色粒(～大)・半透明粒(～小・少)、青灰	口縁部15%、体～底部35%、55g
	24	無台杯	白色粒(～大・少)・半透明粒(～小・微)、青灰、見込み部が鋭く屈曲	20%、45g
	25	無台杯	白雲母(～小・微)・白色粒(～小)、青灰	口縁部5%、体部10%、底部50%、43g
	26	無台杯	白色粒(～大)、灰白～灰、底部ヘラ切り、ロクロ整形にコチや皮等使用か	体～底部35%、34g
	27	無台杯	白雲母(極小・少)・白色粒(～大・少)、灰、底部ヘラ切り	体～底部15%、17g
	28	無台杯	白雲母(極小・微)・白色粒(～小・少)、灰、ロクロ整形にコチや皮等使用か。火燐痕あり	25%、20g
	29	無台杯	白雲母(極小・少)・白色粒(～小・少)・半透明粒(～中・少)、灰、底部に線刻の可能	15%、16g
	30	無台杯	白雲母(極小・少)・白色粒(～中)・半透明粒(～中)、内面：明青灰～暗青灰、外側：明青灰～暗オリーブ灰	体部25%、底部35%、45g
	31	無台杯	白雲母(極小・微)・白色粒(～大)、灰	50%、51g
	32	無台杯?	白色粒(～小・少)、灰、底部回転糸切り後、回しながら手持ちへら削り	25%、29g

れる。蓋には口縁部から天井部内面の外周にのみ自然釉が残るだけでなく（同9）、その内側に高台融着痕が残る個体（同8）がある。従って、正位の高台杯の上に倒位の蓋を、その上に高台杯をと交互に重ねたのであろう。一方高台盤には口縁部から底部内面の高台とほぼ同じ径まで自然釉が残る個体がある（同17）ので、直接重ねて詰めたと考えられる。

胎土は白雲母を含むものが実測個体の約半数を占めるが、極小（径1mm未満）ないし小（1mm程度）、量も微量から少量で、目立たないと言って良い。筆者は常総地域の消費地で出土する須恵器のうち、胎土に白雲母を含む須恵器を新治窯跡群と推測し、ほぼ同じ特徴を持ちながら白雲母を含まない個体を常陸A類と称してきた。常陸A類は硬く良好に焼き上げられた製品が多いため、粘土に混じる白雲母がもともと少ないだけでなく、焼成によって融解する可能性を考えていた（松本2013ほか）。小幡窯の採集須恵器のうち、白雲母を含まないものがこの常陸A類に近い資料と考えられる。また、小さく少ないながらも白雲母を含む資料が定量存在することから、小幡窯で生産された須恵器の胎土は、赤井・佐々木両氏の「新治窯跡群B類」（赤井・佐々木1996）の説明の方が整合的である。

次に小幡窯採集資料全点を器種ごとに分類し、重量計測法で示したのが表1である。かつて筆者は須恵器の

器種構成を考察したことがあるが（松本 2013）、図 4 にそれらの一部と、小幡窯採集資料のうち、窯体付着品や、器種を特定できないものをのぞいて円グラフで示した。石岡市鹿の子 C 遺跡、千葉県市川市国府台遺跡といった国府関連遺跡では高台杯、蓋、盤類を豊富に含み、多様な器種の須恵器が使われたことが明らかである。一方、千葉県流山市域の集落遺跡で出土した資料は、ほとんどが無台杯である。石岡市に隣接する土浦市域の集落では、高台杯は定量あるものの無台杯に比べて明らかに少なく、蓋、盤類も極めて少ない。一方、小幡窯は分類の過程で高台杯か高台盤か判別できなかった資料が 1,434g あることを考慮すると、国府関連遺跡に近い器種構成であることがわかる。多様な器種を高品質に焼いていることから、国府をはじめとする官衙遺跡へも出荷することが窯でも予定されていたのではないか。

(2) 瓦

採集した瓦の内訳は、軒丸瓦 1 点、丸瓦 5 点、平瓦 29 点、性格不明瓦製品 1 点である。

軒丸瓦（図 5-1・2）1 は瓦当部のみで、瓦当面は外区と内区の約 1/2 を欠損し、下半部が残る。文様は素弁六葉蓮華文。中房は半球形に盛り上がり、蓮子は配されていない。花弁は杏仁形で、中房に接続しない。一部の花弁は中房側の花弁端部と中房の間に範傷があるため、接続しているように見える。花弁は丸く盛り上がるが、高さは中房より低い。裏面は上端部に接合粘土が若干残る。整形は粗く、指頭圧痕が残る。接合技法は不明だが、残存する内区外周の破面から、範へは外区の粘土を先に詰め、後に区部分に粘土を詰めたと思われる。

2 は瓦当部と丸瓦部の一部が残る。瓦当面は外区と内区が残るが、外区の形態は不明。内区も花弁の先端部しか残らないので、これも形態は不明。ただし、花弁の形態は 1 とは異なるので、文様も異なることが想定できる。破面に丸瓦部の先端が残るので、接合技法は接合式であったことがわかる。

丸瓦（図 5-3）5 点のうち 1 点は有段式(3)、2 点は厚さからその有段部、1 点は有段式の本体部の可能性が高く、1 点は丸瓦であることはわかるが、形式や部位は不明。不明の 1 点を除く 4 点の凸面は、有段部が横方向に、本体部が縦方向になでられる。3 は有段部に粘土板の接合痕跡が残り、厚さは有段部から本体部にかけて 1.2 ~ 1.5cm ほどほぼ同じ厚さである。2 点の有段部と思われる瓦の厚さは 1.2 ~ 1.5cm であり、似る。ただ、丸瓦本体部が残る 1 点は厚さが 2.0cm とやや厚い。

平瓦（図 5-4 ~ 10）29 点すべてが 1 枚作り。凸面は長縄叩きの痕跡を残す。叩きの種類は縄目の粗密で分類できそうだが、細分はできなかった。瓦の上下が判明する資料を見る限り、叩きは工人が瓦の左側面側にいておこない、粘土板の糸切りは工人が瓦広端の左右の広端隅部側にいておこなったことがわかる。平瓦の厚さは 1.2 ~ 2.1cm の間に収まり、大半は 1.5 ~ 2.0cm である。掲載した 7 点のうち、7 は狭端部、4 ~ 6・8・9 は広端部、10 は側縁部である。これらからわかる整形のあり方は、以下の特徴を残す。

凹面 布目がのこり、狭端縁・側縁・広端縁をなてる。広端部は、布端部の痕跡が端縁近くに残るもの(5)、端縁から大分離れて残り、端縁に痕跡がのこらないもの(6)、端縁まで布が統き、布端部が残らないものがある

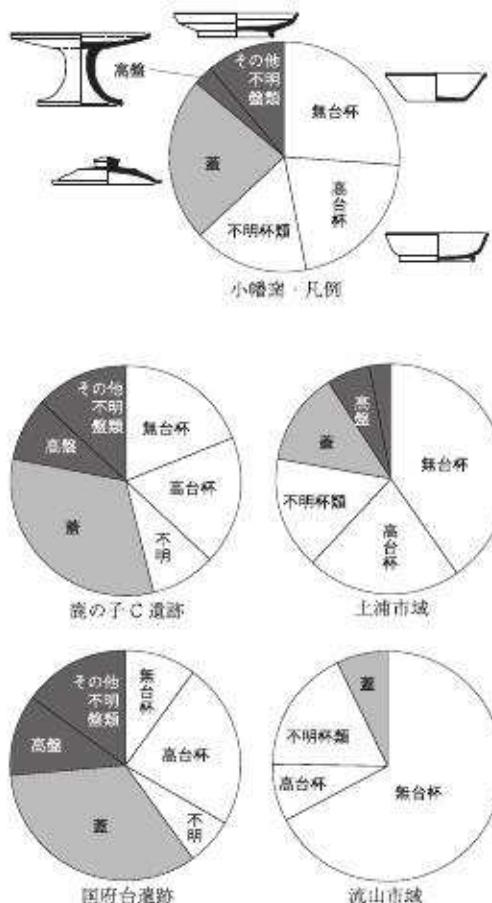


図 4 器種構成の対比
(8世紀後半を中心)

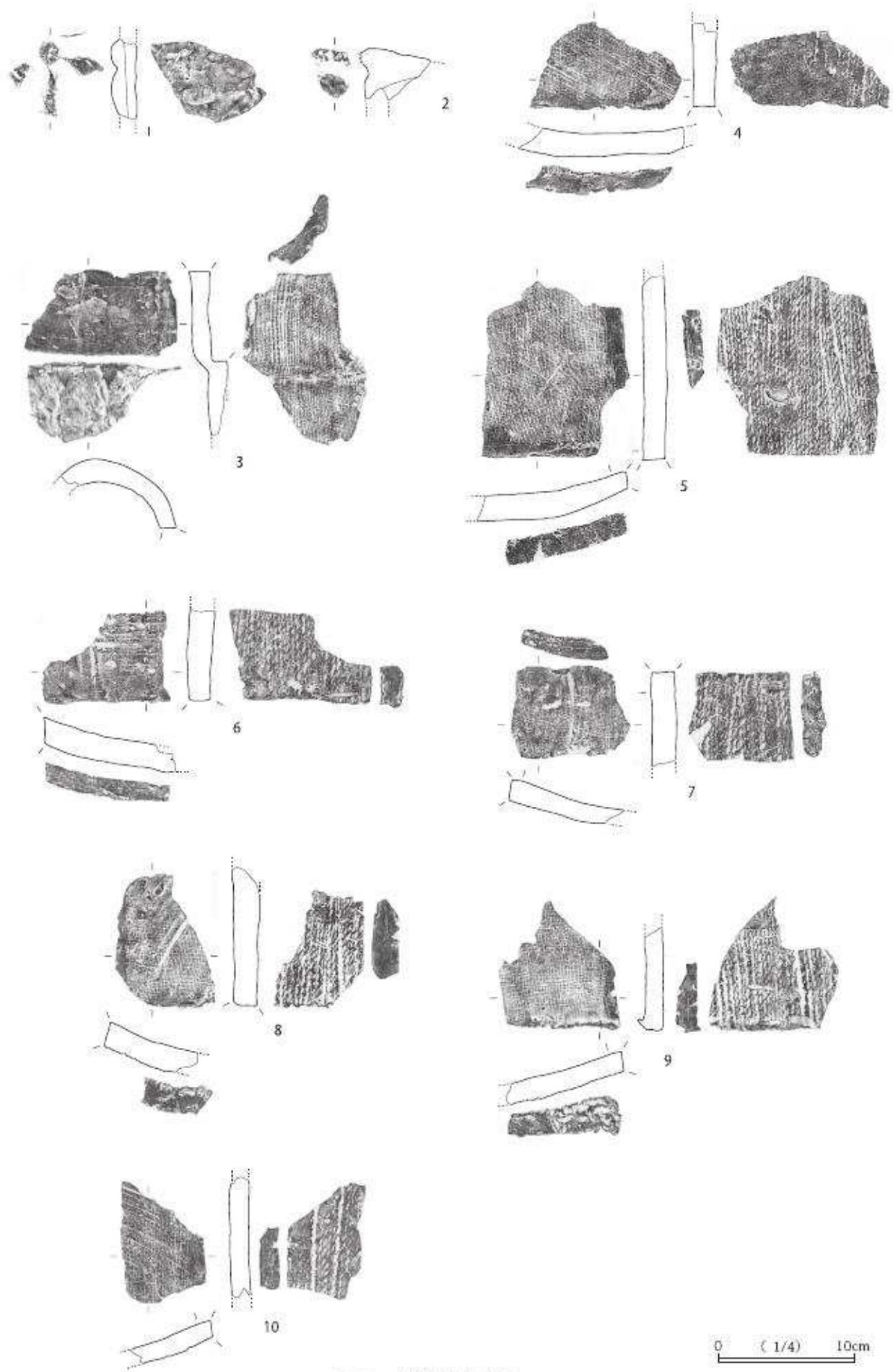


図5 小幡窯跡出土瓦

表2 小幡窯跡 採集瓦観察表

図	番号	器種	含有物・色調・技法の特徴・焼成など	備考
1	1	軒丸瓦	白雲母（～小・少）・白色粒（極小・微）、外面：灰白・芯：灰・内面：灰白、瓦当裏面：なで・指頭痕目立つ	94g
	2		白色粒（～小・少）・灰白	55g
3	3	丸瓦	白雲母（極小・多）・白色粒（～中）、灰白、凹面：布目圧痕、凸面：削り、狹端面：なで？、有段式	201g
5	4	平瓦	白色粒（～中・少）、灰～暗灰、凹面：布目圧痕・広端縁削り、凸面：繩目圧痕・削り、広端面：削り	161g
	5		白色粒（～大・多）、灰、凹面：布目圧痕・側縁削り、凸面：繩目圧痕、側面：削り	418g
	6		白雲母（～小・多）、灰白、凹面：布目圧痕・削り、凸面：繩目圧痕、広端面：削り、側面：焼成や空不良	151g
	7		白雲母（極小・小）・白色粒（～大・少）、灰白～黄灰、凹面：布目圧痕・側縁削り、凸面：繩目圧痕、狹端面：削り、側面：削り	147g
	8		白雲母（極小・微）・白色粒（～大）・透明粒（～小・微）、灰、凹面：布目圧痕・側縁なで、凸面：繩目圧痕、側面・広端面削り	156g
	9		白雲母（極小・少）・白色粒（～中）、灰白～灰、凹面：布目圧痕・側縁削り、凸面：繩目圧痕、側面：削り、広端面：落下等によるゆがみあり	148g
	10		白雲母（～小・多）・白色粒（～中）、灰、凹面：布目圧痕・側縁削り、凸面：繩目圧痕、側面：削り、	98g

(4・8・9)。

凸面 狹端縁は未整形。左右側縁は未整形のもの（5・7・8・9。ただし7は側面の整形ではみ出した粘土を削る）と幅広く叩きをなで消すもの（4・6）がある。広端部は基本的に未整形であるが、側縁をなで消すものは、なで消しが広端縁に及ぶ。

側面 凸面を上にして狭端から広端方向に面取りをせずに一面のみで削る。これら各面の整形のあり方に着目すると、平瓦の成形は、凸面の叩き→側面の整形→凹面の整形の順におこなわれたことがわかる。

小結 小幡窯から北1.2kmに山王台廃寺が所在し、石岡市教育員会はその瓦の供給窯として小幡窯を捉えている。山王台廃寺出土の瓦は黒澤彰哉や茨城県立歴史館によって紹介され（黒澤1992、茨城県1994）、軒丸瓦は素文縁素弁八葉蓮華文軒丸瓦が示されている。今回示した小幡窯の軒丸瓦とは異なるが、1は杏仁形の花弁が中房から離れる配される特徴は同じであり、同系統の文様の軒丸瓦である。山王台廃寺所用の軒丸瓦に新型式の軒丸瓦が加わる可能性が高い。丸瓦・平瓦は、厚さが丸瓦で2種、平瓦ではほぼ同じ傾向を示す。とくに平瓦は成形技法が同じで、整形手法に差異が認められることから、今後廃寺出土の瓦との比較によって、瓦生産の期間や工人の構成などの問題に迫ることが期待できる。

なお、山王台廃寺の採集瓦の実見にあたり、井坂敦美氏、石橋充氏、皆川貴之氏にご配慮、ご協力いただいた。

7 おわりに一小幡窯跡のその後一

発見されたばかりの小幡窯跡からも、研究者により実に様々な情報が見いだされつつある。さらに小幡窯の製品の流通が地域に限定するものではないことが明らかにされた。しかしながら、遺構そのものの情報はまだ多くはない。今後の解明が求められる。

常陸国衙に関連する八郷盆地内の須恵窯としては瓦塚窯跡でも1基が確認されている（小杉山2015）。今回の発見と併せて古代の須恵器流通の詳細が明らかになることが期待される。

この窯跡の発見者の野村氏も矢野も埋蔵文化財の専門家ではない。しかしながら、埋蔵文化財研究者からの示唆を記憶の片隅に置いておいたことから今回の発見に至ることができた。埋蔵文化財関係の情報が市民に与えられることによって市民による新たな遺跡の発見が促進されることを強く意識する。これは、市民に与えられた情報から市民が行動し、未知の埋蔵文化財の破壊散逸を防ぐきっかけとなることが可能であることを示している。埋蔵文化財関係者からの適切な情報が新たな遺跡を発見し、守る鍵となり得る。

小幡窯跡の発見については、発見者の野村真一氏をはじめ、今まで記した埋蔵文化財関係者のご協力はもとより、現土地所有者の片野仁氏のご理解ご協力に感謝いたします。

（文責1～5、7：矢野徳也、6：(1)松本太郎、(2)山路直充）

<参考文献>

- 赤井博之・佐々木義則 1996 「新治窯跡群杯 A の変化について－消費地における形態と調整技法様相－」『婆良岐考古』第 18 号 婆良岐考古同人会
- 茨城県立歴史館編 1994 「山王廃寺」「茨城県における古代瓦の研究」茨城県立歴史館
- 黒沢彰哉 1992 「常陸の古代山岳寺院－高倉廃寺を中心にして－」『茨城県立歴史館報』19 茨城県立歴史館
- 小杉山大輔 2015 『瓦塚窯跡発掘調査報告書』石岡市教育委員会
- 佐々木義則 2014 「第 11 回企画展常陸国の須恵器生産－最近の調査・研究から」『ひたちなか埋文だより』第 40 号ひたちなか市埋蔵文化財調査センター
- 松本太郎 2013 「東国の土器と官衙遺跡」六一書房



写真1 小幡窯跡の窯体と灰原(東から、○付数字は窯の、()付数字は灰原の番号)



写真2 窯(1)と灰原(1)(東から)



写真3 窯の確認状況（東から）



写真4 灰原(1)確認状況（南から）



写真5 窯の確認状況（南から）



写真6 窯の確認状況（南から）



写真7 窯の確認状況（南東から）



写真8 灰原(1)確認状況（南から）



写真9 灰原(1)確認状況（南から）



写真10 灰原(1)確認状況（南から）

報告書抄録

ふりがな	しないいせきちょうさほうこくしょ
書名	市内遺跡調査報告書
副書名	
巻次	第 11 集
編集者名	谷伸 俊雄
著者名	谷伸 俊雄 江野 徳也 松本 太郎 山路 直充
編集機関	石岡市教育委員会
所在地	〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680番1 TEL 0299-43-1111
発行年月日	2016 (平成 28) 年 3 月 31 日

市内遺跡調査報告書

第 11 集

2016 (平成 28) 年 3 月 31 日発行

編集 石岡市教育委員会 文化振興課

発行 石岡市教育委員会

〒315-0195 茨城県石岡市柿岡5680-1

TEL 0299-43-1111(代)

FAX 0299-43-1117

印刷 共和印刷株式会社

〒315-0001 茨城県石岡市石岡2747-68
